イスラーム世界研究　第12巻（2019年3月）222–251頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 12 (March 2019), pp.222–251

デカンの美食と聖婚――ダカニー・ウルドゥー語の詩人ヌスラティー

北田　信*　訳

1. デカンの詩人ヌスラティー

今日、一般的にウルドゥー語の古典文学として読まれ、研究されるのは18世紀初頭に始まる、北インドのデリーやラクナウーを拠点として著された詩文学である。それ以前の北インドでは、著述活動はもっぱら外来のペルシア語を用いて行われていた。しかし北インドでウルドゥー語を用いて文芸が盛んになる以前に、南・中央インドのデカン地方では、ウルドゥー語の前身となるダカニー語（ダカニー・ウルドゥー語）[1] を用いた文芸伝統が既に350年も続いていた。外来の書き言葉ペルシア語に替わって、現地の話し言葉をアラビア文字で筆記して著述に用いる、ということが始まったのは、中央（デリー）から物理的にも心理的にも遠く離れた周縁部デカンであった。ダカニー語文学の形成過程は、文字に書かれてこなかった民衆[2] の「声」が文字で書かれる過程に他ならない。発話された瞬間消えてしまう物理的現象としての「声」が、文字という形式で視覚化・固定化され、恒久的に残るものになっていくとき、今までぼんやりとしていたデカンのアイデンティティーが明確に意識化されるようになり、輪郭が定まっていく。デカンのアイデンティティーを定める原理として、次の三つのものがあった――

A. 北インド（デリー）からのデカンの自立
B. 外来のペルシア語文学に対抗して現地語で著された文学としての自立
C. インド系文字で書かれるヒンドゥー教徒の文学に対抗して、アラビア文字で書かれたムスリムの文学としての自立

本稿ではダカニー語文学の最高峰の一人である詩人ヌスラティーが著した恋愛物語詩（マスナヴィー）『愛の花園』(Gulšan-e-ʻIšq) を扱い、そのクライマックスにおける饗宴と美食および婚礼初夜を描いたくだりを訳出する。また著者のダカニー語に対する思い、そしてダカニー語を用いた著作活動について述べた箇所を考察する。

17世紀の詩人ヌスラティーあるいはムッラー・ヌスラティー[3] (Mullā Nuṣratī) は、“詩人たちの王” (Malik ul-Šuʻarā) の異名を取り、ダカニー語文学の一大拠点であったビージャープル王国に栄

*　大阪大学大学院言語文化研究科准教授

1）今日では、この言語をウルドゥー語の先駆形と見なし「ダカニー・ウルドゥー語」という名称で呼ぶが、厳密にいうとこれは時代錯誤である。「ウルドゥー」という言語名称は、この当時まだ存在していなかったからである。この言語を話す当時の人々はこれを「デカンの言語」を意味する Dakanī、あるいはペルシア語に対置されるものとして「インド語」Hindī と呼んだ。したがって本稿では「ダカニー語」という名称を用いる。

2）しかしそれでは「民衆」とは具体的に誰を指すか、ということはなかなか厄介な問題である。ダカニー語が話されている地域はドラヴィダ語（テルグ、カンナダ）圏に取り巻かれていた、という状況も考慮せねばなるまいし、また、民衆の話し言葉に基づいているからといって、庶民の中に読み書きのできる者が多数いた、と考えることには無理がある。ダカニー語の文学作品を読むことができたのは、アラビア語・ペルシア語の知識のある教養人に限られる。ただし、教養人が書物を声に出して読み、難解な語彙には解説を差しはさむなどして、一般人に紹介する、というようなことは行われたであろう。また、Hutton［2011: 52］は、ダカニー語の文学作品が宮廷の後宮の女性達の間で読まれていたという説を紹介している。確かに、アラビア語・ペルシア語の読み書きを知ってはいるものの、さほど堪能ではない宮女たちが、余暇の楽しみとして母語ダカニー語で書かれた詩やお伽噺を好んだということは容易に想像できる。

3）ヌスラティーの人物に関しては［Kāšmīrī 2009: 128–145］を参照せよ。同書137頁によれば、詩人の没年は西暦1674年（ヒジュラ暦1085年）である。

えたビージャープル学派の集大成者にして最後の巨匠である。

ヌスラティーはビージャープル国王 Muḥammad ‘Ādil Šāh (AD 1627–1656) の治世に幼少期・少年期を過ごし［Kāšmīrī 2009: 136］、青年期から老年期にかけて ‘Alī ‘Ādil Šāh II (AD 1656–1672) および Sikandar ‘Ādil Šāh (AD 1672–1686) に仕えた。

ヌスラティーが生きた時代のビージャープル王国を取り巻く軍事的状況は次のようであった。西暦 1632 年にムガル皇帝シャージャハーンの軍勢がビージャープルを攻撃して打ち負かすことにより、ムガル勢力のデカンにおける優勢が決定的になる［Kāšmīrī 2009: 136］。その後もムガル皇帝アウラングゼーブによる攻撃が繰り返された。おそらくヌスラティーは、ビージャープル王国とそこに栄える文化芸術の滅亡が迫っていることを悟っていたと思われる［Kāšmīrī 2009: 130］。実際、詩人が没して約 12 年後の西暦 1686 年、ついにムガル軍がビージャープルを占拠し、ビージャープルはムガル帝国に併合されることになる［Kāšmīrī 2009: 143］。

ビージャープル王国を取り巻くこのような地勢的状況を反映して、ビージャープル学派では戦記物 (razmnāmah) が盛んに作られた。戦記物の代表的著者として Šauqī, Rustamī[4] などの名が挙げられる。ヌスラティーの作品も、戦記物を主とし［Kāšmīrī 2009: 135］彼はダカニー語文学最高の戦記物作家と見なされる［Kāšmīrī 2009: 137］。

ヌスラティーの代表的戦記物は『アリー王伝』(‘Alī-nāmah) である。この作品では、詩人のパトロンであったアリー・アーディル・シャー二世の武勲を史実に基づいて称える。アリー王の治世の初めの 9 年間（西暦 1656–1665）に行われた、シヴァージー率いるマラータ勢力との戦い、およびムガル軍に対する勝利を描く［Kāšmīrī 2009: 137］。

これとは対照的に、本稿で扱う『愛の花園』(Gulšan-e-‘Išq)[5] は、架空の恋愛物語である。物語の筋そのものは、同時代に存在した数多くのお伽噺 (Maṣnavī) の類にさほど異ならない。ある国の王子マンハルが、夢の中で見た遠方の国の王女マドゥマーラティーに恋してしまう。王子は王女を探す旅に出、艱難辛苦と紆余曲折に満ちた長い道のりを越え、敵を倒して王女を見出し、めでたく結ばれる。

ウルドゥー語の起源から 19 世紀に至るウルドゥー文学史を概観した Kāšmīrī 博士は、ヌスラティーを評して、彼が得意としていたのは戦記物であり、恋愛物語においては他の作家たちに劣っている、と述べる。彼の恋愛描写は借り物の様 (iktisābī) であり、愛の感覚的深みを突き詰めることができていない、という［Kāšmīrī 2009: 137］。女性美を描写するのに多彩な比喩表現を用いてはいるが、そこには感情・感覚・ファンタジーの熱が欠けている。セクシャリティーに関する彼の態度はいささか冷たい、という［Kāšmīrī 2009: 133］。人間に対して冷淡である代わりに、自然描写では力を発揮し、その叙述は色と音楽に溢れている、という［Kāšmīrī 2009: 134］。確かに、『愛の花園』のあちこちでなされる自然描写は、ほとんど官能的である。

しかし物語を読み進めていくと、終盤に至って Kāšmīrī 博士の評は覆されるようだ。そこでは婚礼の祝祭についての詳細な記述が続き、歌舞音曲、美食、庭園、賑やかな行進、等々が活き活きと描写され、さらに初夜の交情の始終が語られる。性行為の描写の多くは、古代インドの性愛経典『カーマスートラ』に依拠し、比喩を多用し技巧的であるものの、決して冷淡というわけではない。確かに、クリー・クトゥブ・シャー[6] が後宮での私生活を赤裸々に描写した詩群に感じられるよう

4） ペルシア語の戦記物 *Xāvarnāmah* を平明で躍動感のあるダカニー語に翻案した。

5） 西暦 1658/1659（ヒジュラ暦 1068）に完成した。

6） ビージャープル王国と並ぶ、ダカニー語文学の拠点ゴールコンダ王国の最盛期に国王であった人物。精力的に

な熱さはないが、それは“冷淡”というよりも、むしろ宮廷詩人に相応しく、エロスを様々な技巧のオブラートで包み隠したことによるのだろうと思われる。後宮での男性能力を顕示することが、為政者としての能力の顕示と重なる王者とは違い、ヌスラティーの立場は、あくまで王者に仕える廷臣のそれであった。この言語芸術の職人は、性行為という題材を、戦術・天文学・料理学などの専門用語を比喩的に用いて上品に隠蔽すると見せかけながら、その実、大胆に描写した。

2. 『愛の花苑』における美食――婚礼の祝祭で供された御馳走

この作品のクライマックスにおけるヒーローとヒロインの婚礼の描写は、詩人ヌスラティーの卓越した才能を窺うのに最も適した箇所である。以下に訳文を示す。なお、翻訳の際には原文に忠実な直訳を心がけ、日本語として美しい文章を目指すことはしなかった。ヌスラティーの作詩技巧を詳細に観察し論じたいと考えたからである。直訳体であっても、ヌスラティーの詩の素晴らしさは読者に十分伝わるものと信じる。

使用したテキストについて

使用したテキストはカラーチーで出版された［‘Abdulḥaqq 1902］である。各ページに難解な語彙の解説が載せられ、巻末に語彙集が付いた便利なものであるが、残念ながら誤植が多い。幸い、フィラデルフィア美術館所蔵の写本（Phil. M. と略す）はオンラインで一般公開され簡単にダウンロードできる。‘Abdulḥaqq 版で解釈が難しい場合には、写本を参照して解決できることがあった。本来、校訂本と写本を突き合わせて全面的に再検討するべきであろうが、果たせなかったことをお詫びしておく。

転写の仕方について

原語のローマ字転写の方式については、新期インド・アーリア語、サンスクリット語、アラビア・ペルシア語など個別の言語ごとに別々の転写法に従った。しかし場合によっては一つの表現や句の中に複数の言語が入り混ざる、という厄介なものもあり、残念ながら良い解決を見出すことができなかった[7)]。ここでお詫びするとともに、読者のご理解を頂けるようお願いする。

原文アラビア文字の綴りとその発音を議論する際には、アラビア文字をローマンアルファベットに置き換えた。その際、アリフ文字を便宜的にアルファベット A で転写した。例えば K.T.A.B. = kitāb あるいは A.X.T.Y.A.R. = ixtiyār といった具合である。

訳語として複数の可能性がある場合

訳語として二つ以上の可能性が考えられる場合、あるいは、掛詞において二つ以上の訳語を並べて記す必要がある場合は、それぞれの訳語に下線を引いた。

例　<u>タッチ</u>/<u>魔法の石</u> (paras)

国土拡大を行う優れた為政者であると同時に天才的詩人でもあり、ダカニー語を用いて数多くの抒情詩を著した。

7）ダカニー語彙のうち、純粋な新期インド・アーリア語由来の語彙についてはサンスクリット語やヒンディー語のローマ字転写法を用いる（例 cānd「月」）。しかしペルシア語と新期インド・アーリア語が複合された gul-e-cānd「月の花」のような語が存在し、もしペルシア語転写法を徹底するならば gul-e-čānd と転写せねばなるまいが、そうはしなかった。

この場合、paras の訳語のオプション（選択肢）となっているのは、「タッチ」あるいは「魔法の石」であって、「タッチ」あるいは「魔法」ではない、ということを下線によって明確にしている。

詩節番号について

‘Abdulḥaqq 版本では詩節に番号は付けられていない。本稿では各ページごとに詩節に①から始まる番号を割り振った。そこで、ページ数と番号を記せば、詩節を同定することができる。

例）183 頁第①詩節

＊ ＊ ＊

183 頁

① 食布 (dastarxvān) は、まるで (na keh) 現世の楽園のごとくであった。あらゆる品々は天国の樹 (A. ṭūbā) が作り出した恵み［の果実］である。

② この御馳走の中から一品だけを取って食べても、口の中には十万の妙味が広がった。

③ あらゆる種類の色彩を混ぜ合わせた素晴らしいプラーオ（ピラフ）は、いろいろの花咲き乱れる森を散策するのを思い起こさせた[8)]。

④ 美食の数々により、彩り豊かな草原が生じていた。料理の花咲く森が満開であった。

⑤ モザアファル[9)] は、まるでサフラン園のようだった。カブーリー[10)] においては、菖蒲（あやめ）の花（＝舌の比喩）が香っていた[11)]。

⑥ さらに甘い香りのする白いご飯 (xuškā) が［食布を］飾り[12)]、モーグラー（ジャスミンの一種）の白い花の蕾 (pl.) を憂鬱にした[13)]。

⑦ キチュリー[14)] はスパイスで美味しく、たくさんの果実、花、葉が茂る憩いの住処 (nišēman) のよう。

⑧ ビーツ (P. čuǧandar)［の根］は、蓮華をもたらした[15)]。肉カレー[16)] は、チューリップ (lālāh) の園に咲く水仙 (nargis) のごとし。

8） 字義どおりには、森にはいろいろな花が咲き乱れているが、それでいて心地よい一貫性 (yak raviš kā subhāo) があった。あるいは、一筋の通り道が通っていた。R.V.Š. を A. rauš ‘eating much’ と読めば、「飽食の心地よさがあった」とも解せる。

9） モザアファル A. muẓa‘far, 甘味。サフラン (ẓa‘farān) で色付けしたプラーオ（ピラフ）。

10） カブーリー P. qabūlī ‘acceptable, palatable’「旨いもの」の意味。米とヒヨコ豆を一緒に煮た粥。キチュリーではムーング豆を用いるが、こちらはヒヨコ豆を使うのが違い［Platts 2004］。

11） カブーリーの美味と芳香により、舌が薫じられた。

12） P. xuškā は白米をスパイスなしで炊いたもの。バスマティー米特有の芳香がする。原文 P.H.R.A.R.A.Č. を（問題がないわけではないものの）phir ārā-c として解釈した。

13） 真っ白い米の色と香りが、モーグラーの白い花を凌駕した。H. mōgrā < Skt. mudgaraka ‘The double-jasmine, *Jasminum sambac*, also called Tuscan jasmine’［Platts 2004］. モーグラーの蕾がバスマティー米（長粒）の形に似ている。

以下、学名の表記は参照資料に準じる。現行の正式な学名は分類学の進展に伴って異なっている場合がある。また参照資料が刊行当時の最新の学名を採用しているとも限らない。ただし明らかな誤記・誤植と見られるものに限って、特に注記はせずに修正した。

14） キチュリー H. khicrī は、米とムーング（レンズ豆）を、ターメリックを始めとする様々なスパイスで味付けした粥。祝い事の際に食べる。

15） ビーツの紅色の根を、蓮華の形に細工して飾ったのであろうか。lāyā … bār「花をたわわに付けた、実らせた」などとも訳せる。

16） 肉カレー P. qaliyah ‘Broiled flesh-meat dressed with anything, a curry’［Platts 2004］. 骨付き肉が、チューリップの花と茎のように見えるのだろうか？あるいはチューリップ P. lālah は、H. lālā「唾液、涎（よだれ）」に音が通じるから、涎を垂らしそうなほど旨そうなカレーの中に、咲き乱れる水仙のごとく、骨付き肉の塊がごろごろしている、ということか。

⑨　コリアンダー (H. kōthmīr < Skt. kustumbarī)［の香しさ］の前でダウナー草（マヨラナ / ハナハッカ）は敗れ、ミント (pūdīnā)［の香り］はマルワー草を蹴散らした[17]。

⑩　［真っ白な］ビスケット (P. kāk) は月光花の綽名（あだな）をもらい[18]、クマーチ餅（パン）は向日葵（ひまわり）のように見えた[19]。

⑪　カブーリー（混ぜ粥）の屋敷で、カボチャ (kaddū) とチチンダー（cicindā, 瓜の一種）とトゥライー瓜の大きな蔓草は、四阿（あずまや）(manḍuā) に這い登った[20]。

⑬　大皿 (P. rikābī) がギー (D. ghio) でなみなみと浸された。小さなカップ[21] は、たくさんのチャナー豆でいっぱいになった。

⑭　緑色［の菜としては］ディル草[22] が、緑の水晶のように見える。メーティー草[23] により、緑野全体がエメラルドになった。

⑮　セーム豆［の蔓草］は素早く自分の手（蔓あるいは芽）を長く (lambā) 伸ばし[24]、［それに対し］アルガンド［の花を付けた蔓］があまりにゆっくり (P. kund) なので、四阿は恥ずかしく思った[25]。

⑮　カトラー[26] となったダール豆と合わさって掻き混ぜられ (ghōl)[27]、ハンサ鳥（鵞鳥（がちょう））がサフランの黄色い花に語りかける (bōl rakhē) 様だった。

⑯　［何種類もの］ビリヤーニーに［何種類もの］シチュー[28]［がかかった］山の下に、鳶（とび）[29]や鶉（うずら）の

17）ダウナー (daunā) とマルワー (marwā) は香草マジョラム (marjoram) の一種。Platts 辞書［2004］の daunā の項には The plant *Artemisia indica*（ニシヨモギ）, or *lactifolia* or its flower とある。また daunā-marwā という対になった表現として The *Artemisia vulgaris*（オウシュウヨモギ）, a kind of sweet marjoram とある。

18）P. kāk ‘dry hard bread, biscuit’［Platts 2004］. 乾パンあるいはビスケット。「月光花」(gul-e-cānd)。Platts 辞書［2004］には U. gul-e-cāndnī ‘The moon-flower, *Calonyction roxburghii*（ヨルガオ）’ とある。ビスケットの丸くて白い形が満月に似ている、あるいは月光花の形にデザインしてある。

19）クマーチ P. kumāč は、パン種を入れずに焼いた平べったいパン（ナーン）。これが、向日葵（ひまわり）の大きく丸い花に似ている。

20）チチンダー (*Trichosanthes anguina*（ヘビウリ）) は、今日の南アジアの食卓にも日常的に登る細長い瓜。D. turaṅ, H. turaī ‘The cucurbitaceous plant, *Luffa acutangula*（トカドヘチマ）’ “鋭く尖ったヘチマ” の意。米とヒヨコ豆を煮た粥カブーリーは、屋敷 (ghar) に譬えられ、その敷地内の庭に置かれた複数の四阿にウリ科の蔓草が育って絡みつき、大きな実を幾つもみのらせているという図が描かれている。蓋をした大きな鍋に容れられたのを “家屋敷” に見立てたか？先の 183 頁⑦詩節でもキチュリー粥が「憩いの住居 (nišēman)」になぞらえられていた。

21）原文 kulī を H. kulhiyā ‘a small earthern cup’ と解した。H. binjālā ‘abounding in seed’［Platts 2004］(cf. H. bīj). しかし H. banjārā ‘a grain merchant’［Platts 2004］(cf. Skt. vāṇijya) という語もあり、これを参考にするなら、「小さなカップはヒヨコ豆を売る穀物商人のようだ」とも解釈できる。

22）D. sōyā, H. sōā ‘dill（セリ科イノンド）, fennel（セリ科ウイキョウ）’.

23）H. mēthī ‘fenugreek’ 和名ころは（胡廬巴）。マメ科の薬草・香草・牧草。

24）H. sēm ‘The flat or broad bean’. しかし D. sīm ‘khēt’「畑」という語もあり、また Skt. lambā ‘a kind of bitter gourd or cucumber’［Platts 2004］という語もあるので、前半句は「畑はニガウリの蔓を自分の手として素早く伸ばした」という風にも解せる。

25）原文 H.V.A.R.G.N.D. 植物名らしき argand については脚注および巻末語彙集で「一種の花」とあるが、辞書類には見つからなかった

26）D. katlā, 脚注によれば、チャナー豆とその他の幾つかの野菜を料理したもの。黄色をしている。ただし、この語は料理名としては Platts 辞書に記載されず、H. katlā ‘a slice’ とある。こちらの意味を取れば「［鵞鳥の肉が］スライスされて、ダール豆と一緒に混ぜられて」とも解せる。「サフランの花」はチャナー豆の黄色を指すが、「ハンサ鳥」は鵞鳥の肉片か、あるいは白い色の何かを指すはずである。

27）動詞 ghōlnā は、粉末等を掻き混ぜて溶解させること。もし、チャナー豆に混ぜられるのが肉片だとすると、少々おかしい。しかし H. ghōl ‘purslane’ と読めば、「カトラーとなったダールにパセリを混ぜて」となる。

28）P. yaxnī ‘gravy (prepared to dress *pulāo* in), a rich stew of meat’［Platts 2004］. プラーオやビリヤーニーなどの米料理にかけるトロリとしたシチュー状の料理。あるいは P. yaxnī-pulāo という、シチューをかけたピラフもあり、それを言っている可能性もある。その場合は、ビリヤーニーを盛った皿（複数）とヤフニー・プラーオを盛った皿（複数）が別々に置かれていることになる。

29）原文 lahuē は、lahuā の複数形直格だろうが、この語は辞書には見つからない。文脈から、山鳥の名称であると思われる。写本 Phil. M. (Folio 202b, l. 6) では L.W.Y. となっている。これはおそらく P. lavah: ‘a kite, a bird like a partridge’［Steingass 1996］の複数形であろう。こちらの読みを採用して訳した。

調和した呼び声が聞こえる[30]。

⑰　真鍮のお碗という池には、油が池水 (nīr) のように満ち、その中には魚の切り身たちが［幾つも］、じっと身動きもせず泳いでいる。

⑱　澄んだスープを棲み処として、鵞鳥 (badax) や雄鶏や雌鶏や水鴨 (murğ-ābī) が暮らしている。

⑲　キールには、ギー（精製バター）が、［さざ波の立たない］静まり返った湖水のように湛えられており、その上には白砂糖 (cīnī) や氷砂糖 (šakar)[31] が細かい砂や砂利[32]［のように砂州を作っている］。

⑳　菓子で作った綺麗な露台[33] が［幾つも］真っ直ぐに建っており、その［建材として使われる］煉瓦は、氷砂糖の破片とハイシミー[34] である。

184 頁

①　その［建材として使われる］モルタル[35] (gač) の粉は純白の飴砂糖。麻［の繊維の］代わりに綿菓子 (P. pašmak) が切れ切れ (čāk čāk) に［ちぎられて使われている］[36]。

②　碧玉の石の［ような］ミスリー（A. miṣrī, 円錐形の飴菓子）はつまらないもの (nā bāt) ではない[37]。透明さにおいては眼鏡のレンズの様だ。

③　純粋な蜂蜜がかけられて濡れたセモリナ粉のハルワー[38] は、モルタル (gač) の中に混ぜられた接合［材として用いられる、油滴る］綿 (pambah) のようだ[39]。

④　非常に細かく挽いた［砂糖の粉］は、優しく効くシロップ薬となった。容れ物 (A. ğalīfah)[40] に入った白い粉は三倍になった[41]。

⑤　サモーサーは、肩掛け布[42] の麻布の代わり。砂糖の破片 (šakar-pārah)[43] は、中庭に敷きつめられた絨毯 (farš)[44]。

⑥　透かし彫りの窓 (A. mušabbak) の代わりに、ジャレービーがある[45]。いろんな色のファールー

30）炒めたご飯ものの山の中に、ジビエ（山鳥）の肉片が幾つも埋もれており、「はやくお召し上がりになって！」と口々に誘っている様である。

31）P. śakar, しかし Skt. śarkarā ‘candied sugar’ ‘a pebble, gravel’ という語もあり、新期インド・アーリア語彙とも考えられる。

32）H. bālū ‘sand, gravel, grit’. Platts 辞書［2004］によれば、実際に bālū-sāhī という菓子があるそうで、砂糖が振り掛けられて砂のようにみえるので、そう呼ぶのだという。

33）H. chajā, 枝を広げる樹のように、支柱に持ち上げられたバルコニーのこと。

34）脚注に、haišimī (?) は菓子の一種、とある。現代のバルフィーの様に、牛乳を煮詰めて四角あるいは菱形に固めた菓子のことか。

35）化粧漆喰。壁や床・天井に塗る。

36）煉瓦どうしを接着する際に、麻布の裂片を漆喰に混ぜて用いる。綿飴の繊維をそれに似せた。次の詩節［184 頁③］を参照せよ。

37）nā bāt「お話にならないもの、取るに足りないもの」と A. nabāt「植物（砂糖黍など）から抽出した糖分を使った砂糖菓子、ミスリーに同じ」を掛詞として使っている。

38）挽き割り小麦粉で作ったプディング。

39）脚注によれば、木綿に油を浸み込ませ、煉瓦を接合するための混合材としたもの。

40）籠や包み。薬包のことか？

41）意味不明。

42）H. samōsā は、南アジアの三角形の包み揚げスナック「サモーサー」だけでなく、対角線で折って三角形にして肩に掛けるショールやハンカチのことをも指す。

43）“砂糖の破片” šakar-pārah は、米・バター・砂糖で作った菓子の名でもある。

44）P. farš はタイルなどで敷き詰められた床のことも言う。

45）ジャレービー D. zalēbī, H. jalēbī は、揚げ菓子の一種で、小麦の生地で作った紐をいろいろな形のレース状の環に編んで、油で揚げた後に甘いシロップに浸したもの。

ダ・フィルニーの入った杯[46]。

⑥牛乳［で作った甘い汁］で満たされた碗があり[47]、その中でスプーンが本物の小舟［の様に］揺れた[48]。

⑧　一つ一つのカップが、それぞれ一種類ずつシャルバト[49]（清涼飲料）を容れており、どれもがアムリタ（不死の甘露）で溢れた泉の様だった。

⑨　あたり一面が砂糖の埃にまみれていた。レーオリー（rēorī,[50] 胡麻をまぶした団子）やバターシャー（batāśā,[51] スポンジケーキ）、ラッドゥー（laḍḍū, 団子形の菓子）が盛られていた。

⑩　あらゆる種類の果物が積まれて山となっており、一軒一軒の館[52] (qaṣr) に涼やかな蔭を投げかけていた。

⑪　御馳走の数々が、春の季節の様に雨降った時、客人を接待する宴の主人は、［客人たちを案内し］それらの中［を巡る］花咲く途（みち）の散策 (gul-gašt) をさせた。

⑫　サフラン・ライス (muẓa‘far) の方向に差し掛かって喜ぶ人たちの心の蕾 (kalī) は微笑んで唇 (adhar < Skt. adhara) を花開き始めた。

⑬　カブーリー（前出。ヒヨコ豆と米の粥）の波止場から威勢よく出発した。鶏の胸肉という帆船に乗って。

⑭　しかし[53]、スープ (šīrwā = A. šurbah) に溺れる羽目になった。南瓜［のボート］を浮かべ、すばやく水に飛び込んだ (kaṙkī lagāē)[54]。

⑮　マリーダ[55] の丘に向かって進む者たちが、小指で触れると、そこからはギー（精製バター）の水流が滝のように湧き出した[56]。

⑯　スィヴァイヤーン[57]（sivaiyāṅ, 細い麺状の菓子）という藻草を掴んだ人は、牛乳とギーの［沼水の］ドロリとした澱（よど）み[58] に引っかかった（足を取られた）。

⑰　宴席には酢と酒が置いてあり、その前にはカッテージ・チーズ（パニール）が、そして焼肉（カバーブ）があった。

46）P. fālūdah/pālūdah, firnī は、米粉の細い麺を甘いシロップに漬けた甘味。冷やして食べる。「透かし彫りの窓」と訳した A. mušabbak は、「レース織、網織」をも意味する。ジャレービーや麺状のデザートが、細い糸を編んで作った繊細なレース織を彷彿させる、ということかもしれない。

47）D. bacē, 意味不詳。文字通り「命が助かる」という意味か？文脈からは「湖」というような意味が期待されるところであるが。

48）先行詩節のファールーダ・フィルニーの米粉の細麺は、牛乳のシロップに漬かっているから、それをスプーンでしきりにすくって食べているということであろう。

49）A. šarbat は英 sherbet の語源である。

50）菓子の一種（ミルク・小麦粉を丸く平らに固めてゴマをかけたもの）［加賀谷 2005］。

51）砂糖菓子の一つ（中がうつろ）; スポンジ状［加賀谷 2005］。H. batāśā ‘A thing filled with wind’, ‘sweat-meat or sugar cake (of a spongy texture, and hollow within)’［Platts 2004］.

52）前述の、お菓子で作った建造物のことを指すか。

53）原文 Č.W. を J.W. に訂正し、jō と読む。

54）脚注によると kaṙkī は「水に飛び込むこと」(P. ǧōṭah) の意だという。しかしダカニー語辞書には kaṙkā「岸辺」の記載がある。こちらの意味を採って原文 K.Ṙ.K.Y. を kaṙkē と読み直すなら「南瓜［のボート］を浮かべ (tairā kar) 岸辺に着けた（辿り着かせた）」となる。

55）P. malīdah, mālīdah, 穀物の粉、ミルク、バター、砂糖で作った菓子。「パン屑を粉にして砂糖とギーを加えたパン」［加賀谷 2005］。

56）ここまでの一連の詩節群を「スープの海で遭難したが、南瓜のボートで陸地にたどり着き、マリーダの砂地の丘を登ると、そこにはギーの水流が流れていた」という一種の小人冒険譚として読むことができよう。

57）ダール粉の麺（ナツメ・ミルク入りの麺で、祝祭に食する）［加賀谷 2005］。これがミルク・ギーの甘いドロリとしたシロップに漬かっているのだろう。

58）D. kanjāl ‘the green scum formed on stagnant water’［Platts 2004］.

185 頁

① ちょっと口を開けて、蜜酒 (madh) を味わった者には、たちまち、もっと飲みたいという切望が怒涛のように押し寄せ

② ［外気に当たろうとして］ヴェランダの方に一歩踏み出せば、［空中を飛び散る］綿菓子の綿埃が喉まで登った（息をしようとすると喉に入った）。

③ ［腹ごなしの為に］中庭で飛び跳ねに行く者は、“砂糖の切れ端”[59] の玉砂利が膝まで達した。

④ 美しい紅色 (surang) の酒杯 (jām) に眼差しを巡らす者 (jin) は、ジャレービーの網目 (D. jhajjar) に目を奪われる[60]。

⑤ 甘味［の散策道］に口を巡らせて疲れたら、そこから離れ、［今度は］塩辛いものへの道を辿る。

⑥ ［所狭しと並べられて互いに］くっ付いたレーオリー（胡麻団子）の団子菓子 (laḍḍū) という供物 (buttī)[61]［が供されると］［客たちは］やって来て冷たくひやしたのや、あるいは［揚げたてで］熱いままのに手を伸ばす。

⑦ ハイシミー[62] やアンダルサー[63] の煉瓦が置かれ、青息吐息[64] で、話を聞いても耳に入らない[65]。

⑧ どこかの地点に綿菓子 (P. pašmak) の砲丸が命中すれば、胡椒[66] の［ピリッとした］打撃／鞭打ち[67] が与えられる。

⑨ 時折、手と口の間には平和 (sang) があるのにもかかわらず、甘みと塩味の間には戦争 (jang) が生じた[68]。

59）P. šakar-pārah, 菓子の一種（米粉・バター・砂糖で作り、シロップで照りをつけた四角の粒）［加賀谷 2005］。

60） Č.H.J.R. mēṅ zalēbī sē saṅpṛē naẓar［‘Abdulḥaqq ed.1902］. Č.H.J.R. は辞書に見当たらないので誤植と考え、jhajjar と読み替えた。網状の揚菓子ジャレービーは前出（184 頁⑥詩節）。ブランデーとチョコレートのように、ジャレービーを酒のツマミとしたのだろうか。D. jhajjar は「穴がたくさん開いている」ことを意味し、多孔質の素焼きの土製壺や格子窓や網などについて使う形容詞である (cf. H. jhajjhar, jhajjharī ‘a porous goblet, a screen’)。H. suraṅg については同音異義語「穴、トンネル」も存在するので、それと掛けているか。

写本 Phil. M. (Folio 203b, l. 8) では jhajjar mēṅ zalēbī kē sanpṛē naẓar となっている。‘Abdulḥaqq 版 zalēbī sē では意味を取りにくいので、こちらの zalēbī kē を採用した。

61）レーオリーは前出（184 頁⑨参照）。D. buttī はデカン地方でモハラムの時に供えられる食べ物。レーオリーとラッドゥー (laḍḍū) は両方とも球形をしているが、本来は別物。ここではラッドゥーを単に「球状の菓子、団子」という意味で用いているか、あるいは文法的には問題があるものの、レーオリーとラッドゥー二種の団子菓子が並べられている、と解釈すべきか。

Č.N.P.Y.A.N. (čanpiyāṅ?) は不明。写本 čēnpiyāṅ ‘to stick, or gum on’ を採用する。あるいは H. campā「（芳香の黄色の花を付ける）キンコウボク」あるいはその形容詞形 campaī「黄金色の、オレンジ色の」に関連する意味だとも考えられるが、たしかに現在のラッドゥーは黄色・橙色をしているものの、レーオリーのほうは胡麻をまぶしてあるので、この形容は当てはまらないのではないか。

62）前出（183 頁⑲）。

63）米と小麦による甘味。H. andarsā ‘a kind of sweetmeat made of rice and flour formed into balls, then fried in ghee and covered with sugar’［Platts 2004］.

64）halak dam. D. halak「痩せて弱弱しい」。脚注によれば、息がつかえること。

65）前半句・後半句の意味の繋がりは不明。菓子があまりに旨すぎて上の空になり、相手の会話が耳に入らない、ということか。あるいは、煉瓦を積んで生き埋めにされて、息をすることもままならないというような状況を想像すればよいか？ 後半句の Y.N.Ṭ. は前半句の īnṭ と韻を踏むはずであるが、īnṭ という語は辞書類に見えない。あるいは動詞 ainṭnā ‘to twist’ の語幹形か？ S.N.Y. を sunē と読んだが、D. sinā (< P. sīnā)「胸」の後置格とも読める。これと併せ bāt を bāṭ「道」と読むことを許される場合には「菓子が胸につかえて息が詰まり喉を通らない」というような状況を読み取ることができるが、どうであろうか。

66）D. mīrcī, 胡椒の粒の形が弾丸に似ている。

67）D. kōrrā = H. kōṛā, 文字通りには「鞭」。辛味の鞭打つような鋭い刺激がある。甘い綿菓子の中に薬味として胡椒を入れたのだろうか。

68）「平和」(D. sang < Skt. saṅga) と「戦争」(P. jang) が韻を踏むことを利用した巧みな表現。手で食べ物を掴んで口に持って行く、という手と口の間には協力関係がある。しかし料理の味のほうはといえば、甘さと塩辛さという相反する味覚を組み合わせて複雑な味わいを醸し出している。ここまでの一連の詩節群では、あれやこれやの甘い菓子と塩辛い菓子が述べられてきた。また直前の詩節⑧では、まさに、綿菓子の甘みと、そこに隠し味として加えられている胡椒の刺激とのコントラストの絶妙さが述べられている。

⑩　二つの［相反する味覚］の間で、これら［種々の］御菓子は、瞬く間に、生命の水 (āb-e-ḥayāt) の様に、生命 (jīo)（= 身体）を冷ましてくれた[69]。

⑪　アレクサンドロス (sikandar) 大王は、［生命の］水のことばかり考えて心が乱れ、不安の挙句、闇の中で命を落とした[70]。

⑫　［ところがこの宴の場では］聖者ヒズル[71] が［客人達に］「どうか御飲みくださいませ」と嘆願しながら、この水を皆に飲ませつつ、あちこちを回る。

⑬　もし私が［これらの］甘い御菓子がどれほど美味だったかをちょっとでも書き記そうとするなら、［たちまち］私の手に持つ葦ペン (qalam) は砂糖黍の茎 (nai-e-šakar) みたいになってしまうでしょう[72]。

⑭　塩味の効いた (salaunā) スナック (khārā) の話を描こうとすると、塩入れ容器 (namakdān) が、綺麗な (chabīlā)［模様の施された］インク壺となってくれるのです[73]。

⑮　［読者の皆さんに］そういった旨いもの (swād) を想像していただく為に、女性の唇や顔（かんばせ）を思い出していただきましょう[74]。

⑯　［そうすることによって］恋する人々が常に、この恩恵 (ne‘mat) を、安寧 (rāḥat) に他ならない［この喜び］を、心に留めている (dhyān dhar) ことができるように[75]。

⑰　食事を終えて客人達が満腹すると、手を洗わせ、全員に恭しくパーン[76] が配られた。

この詩節にあるとおり、当時も現在の南アジアと同様に、基本的には手で食事していた。脚注は「口と手の間に、甘い味を採りたいか塩味を採りたいかを巡って喧嘩が生じ、口に入れたいと欲するのとは違うものに手が伸びる」と解するが見当違い。

69）原文 pāk-zāt を「種々の御菓子」と訳した。H. pāk < Skt. pāka は「調理」「料理」を意味するが、Platts 辞書［2004］には ‘confectionery’ の意味も記載されている。文脈は、食事の後のデザートで口直しをすることを述べているから、「料理の品々」ではなくデザートの品々を指すと考えるのが妥当。アーユルヴェーダによれば、六種ある味覚のうち甘味には冷却作用がある。「生命の水」とは、イスラームの伝説に言われる、世界の果ての地底の泉から湧出る不死の水のこと。「生命」と訳した語 D. jīo (= H. jī) は、他のインド・アーリア諸語では「身体」を意味することもある (cf. Nepali. jiu)。ここでもそういう意味になっているようだ。

70）前の注で述べたとおり、不死の泉は世界の果ての地底の暗闇の奥にある。実際には、大王の為に不死の泉を探して旅したのは大王自身ではなく彼の臣下で、大王自身はそれを待ちながらアジア遠征の中途で病に倒れて死ぬのである。

71）聖者ヒズル (Xiẕr) は、地底にある生命の水の泉を守る聖者。水の流れを司るゆえ船乗りの守護聖者として信仰される。

72）葦ペンは、葦の茎の先を斜めに切り取って作る。インクを垂らす葦ペンが、砂糖水を滴らせる黍の茎の様になってしまいそうだ。

73）「塩味の効いた」と訳した形容詞 D. salaunā < Skt. *sa-lavaṇaka は字義通りには「塩 (laun < Skt. lavaṇa) を備えた」という意味である。Skt. lavaṇa「塩」は「美しさ」をも意味する。ペルシア語 namak「塩」も同様で、美女の「魅力」や、語りの「妙」の意味でも用いる。「綺麗な」と訳した形容詞 chabīlā は、梵語 chavi「光沢、色艶、光彩」から派生したもので、文章が陰翳に富み彩り豊かであることをも言う。ここでは二つの意味が掛けられていて、裏の意味は「機知の妙に富んだ話をしようとするとき、美しい細工を施された塩入れ器がインク壺となって、話に絶妙な陰影やアクセントを加えてくれる」となる。

74）H. swād < Skt. swādu「味わい、美味、旨味」だが、アラビア語の swād は「黒色のインク」の意。「黒インクで文章を書いて、美女の唇や顔つきを描写する」という意味も掛けている。

75）「恋する人々」(‘āšiqān) は様々な意味で解することができ、文字通り恋愛に溺れる人を指すこともあれば、神秘的な愛に身を焦がす修行者（スーフィー）や、放蕩者 (P. rind) や吟遊詩人という意味にもなる。さらにダカニー語抒情文学においては、サンスクリット古典美学に言われるところの粋人 (rasika)、つまり梵語で “心ある人” (sa-hṛdaya) と呼ばれる、芸術を解する繊細な感性を盛った人物 (connoisseur) をも含意すると思われる。『愛の花園』のクライマックスでは、歌舞音曲や美食、さらに性愛の快感の享受までもが、天から贈られた賜物であり平安である、と言われる。現世的な享楽が宗教的な法悦に譬えられるのは、ヒンドゥー教タントラ思想において、現世的快楽を通じて解脱の平安 (Skt. śānti) に到達することができる、と考えることと同じである。詩人ヌスラティーはダカニー語を用いて享楽の数々を克明に記録した。それは彼にとって一種の瞑想・観想 (Skt. dhyāna) のようなものであった。

76）たとえば今日のハイダラーバードのスイート・パーン（甘い味付けのデザート風パーン）はキュッと締まっていて、キンマの葉の中には真っ白なココナツ・パウダーが詰まっており、カクテル用の赤いチェリーが楊枝で刺してある。パーン屋の店頭には一つ一つ丁寧にビニールで包装してガラス張りの冷蔵ケースに並べてあり、ひんやりとした状態のものを売ってくれる。

⑱　ああ、なんと素晴らしい！ ケーオラー[77] の細い花びらが散らされており、それからチューリップの花が生じている[78]。

⑲　パーンを食べる［人の白い］歯[79] は真っ赤に染まり、エメラルド[80]［や］ダイヤモンドを濡れたルビーに変じた［かのようだ］。

⑳　何日もの間、この様に宴を催して祝い、初夜が近づいてきたとき、

㉑　［花嫁・花婿の家族］双方の全員が、儀式を執り行うために幸せな気分で出発した。

㉒　サフラン色のターメリック・パウダーを大皿に盛り、その上に太陽［のように燦然と］輝く金箔［を散らしたもの］が［幾つも会場を］めぐった。

㉓　香油を容れたガラス瓶は北極星［の輝きを放ち］、メヘンディーの丸皿は月［の心痛を］癒しがたいものにした[81]。

（これに続いて、花嫁にターメリックを塗る儀式を行い、メヘンディーの文様を施す場面が、七つの惑星の登場に擬（なぞら）えながら語られる。）

【解説】 嗜好品パーンについて

南アジアでパーンと呼ばれる、噛んで味わう嗜好品は、蒟醤（キンマ）(*Piper betel*) の葉に石灰を水で溶いた液を塗り、檳榔 (*Areca catechu*) の実（檳榔子（びんろうじ））や香辛料（丁子（クローヴ）等）などを入れて巻いたものである[82]。口に含んで噛むと刺激的な辛味と渋みが広がり、食後の眠気を払い、消化を促進してくれる。酩酊作用がある。噛んでいると唾が檳榔子から染み出た液と混ざって赤い色の液となり、これを吐き出すか、あるいは飲み込むかする。

サンスクリット語ではターンボーラ Tāmbola と呼ばれ、サンスクリット語の古典文学にも、客人の接待に不可欠のものとして、よく言及される。今日の南アジアでも好まれ、道端の露店で売っているシンプルなものから、食後の豪華なデザートとして銀箔を張ったり、ケーオラーの花びらを散らしたりするなど美しく趣向を凝らしたものまで、様々なランク・種類のものがある。キンマの葉独特の辛味と様々なスパイス、甘みが混ざり合った複雑な味わいと、噛んでいると、じわりとやってくる酩酊と充足感は、南アジアの美意識を象徴しているがごとくである。『愛の花園』で描

77）H. kēorā, *Pandanus odoratissimus*（アダン）. 花は非常に強く甘い香りを持つ。「タコノキ科小木トゲナシアダン・アダン (*Pandanus tectorius*)」［古賀・高橋 2006］。この花の香りを付けた水 (Keora water) は、ビリヤーニーなど肉料理の香りづけに使われる。

78）チューリップの花の形になっている、あるいは、赤い汁が染み出ている。パーンの赤い汁に染まった舌が、チューリップの花に似ているのか？

79）脚注は D. dasan を「舌」とするが、Skt. daśana は「噛むこと、歯」を意味する。サンスクリット古典詩では美女の歯を宝石に譬え、ここでもそれを踏まえている。

80）D. pāc ‘emerald’ (zumurd)［Ja‘far 2008］. この語は［Platts 2004］にも記載され、そこでは梵語彙とされているが Apte の梵語辞書には見えない。しかも当詩節では白い歯の譬えとして用いられており、必ずしも「緑晶、エメラルド」を意味しないのではないか。むしろ一般的な「結晶、宝石」というような意味で、後続の A. almās「金剛石」と一緒になって複合語 pāc almās（あるいは偽ペルシア複合語として pāč-e-almās）をなし、「ダイヤモンドの結晶」というような意味になるのではないか。ちなみにダカニー語辞書［Ja‘far 2008］は上記のように pāc を「エメラルド」とはするものの、例文としてワジュヒー作『クトゥブ・ムシュタリー』を引用し、そこではこの語が同韻の kāc「水晶」と対になって用いられている。以上の仮説が正しいとすれば、後半句は「ダイヤモンドの結晶を濡れたルビーに変じた」と解せる。

81）透き通ったガラス瓶の冷たい輝きが北極星（シリウス）のようである。後半は、メヘンディーを盛った丸皿の完璧さが、月の円満さを凌ぎ、月の自尊心を傷つけた、という意味であるが、メヘンディーの色は赤茶色なので、白い月に対比させるものとしては不自然である。あるいは前半と後半が繋がって「シリウスのような輝きを放つガラス瓶の透き通る白さを前にして、メヘンディーを盛って赤茶色の斑点が付き汚された満月のような銀製の盆は、誇りを回復不可能なくらい傷つけられた」というような意味になるか。

82）Cf. ［西岡 1988: 145–147; 中村 1994: 169–172］。

写されるような工夫を凝らして作った豪華なパーンは、古くからあったらしく、例えば七世紀の詩人バーナ Bāṇa が著したハルシャ・ヴァルダナ王伝 *Harṣa-carita* には、ハルシャ王子が誕生した時の祝祭のパレードの中に見える、豪華なパーンを美しい箱に入れて運ぶ後宮の侍女たちのことが次のように描写されている。

> 水晶を砕いたように白い樟脳の破片を容れた皿や、宝石を嵌め込んだ容器にサフランの香水を容れたものや、マンゴー (sahakāra) 油で濡れた檳榔の繊細な花蕊が大量に重なって網のように毛羽立って見えたものと、梅檀の様に真っ白な檳榔子 (pūga) のかけらがギザギザの列をなしたものを象牙製の箱に容れたのや、ブンブンと羽音を立てる蜜蜂が群がって貪るように飲むパーリジャータ花[83] の香水で深紅色をしたものや［…］蒟醤の蔦木のしなやかな若木に［五十枚の葉に包んだ］パーンを吊り下げたものを運ぶ侍女たち［…］[Kane 1986: 62; 399f]

蒟醤を噛む習慣は、インド・ムスリム文化にも引き継がれた。ムガル朝末期に繁栄したラクナウーの生活を描いた『いにしえのラクナウーの最後の春』には、花街と遊女を扱った章があり、当時の社交界の様子や社交の作法について克明に記されているが、そこにもパーンに関する記述がある[84]。

3.『愛の花苑』における性描写――マンハル王子とマドマールティー王女の初夜

＊ ＊ ＊

191 頁

⑫　なされるべき[85] 儀式 (rīt < Skt. rīti) を済ませると、［人々はカップルを］寝台 (Skt. palaṅg[86]) の暗がりに連れてきて降ろした。

⑬　たちまち、苦しみ［の代わりに］十万の喜悦を現そうと、和平の戦[87]（＝愛の戦）が始まったかのようだった。

83）Skt. pārijāta, 梵語辞書 Apte はこれをナイト・ジャスミン *Nyctanthes arbor-tristis*（モクセイ科ヨルソケイ、インドヤコウボク）とする。しかし中村［1994: 122f; 170］、古賀・高橋［2006］、西岡［1994: 80f］は全てマメ科高木デイコ *Erythrina indica* とする。西岡（同掲）によるとパーリジャータの花は、とりわけ赤い。中村［1994: 169–172］は檳榔樹を解説するにあたって嗜好品 蒟醤に言及し、七世紀頃の詩人ダンディン著『十王子物語』を引くが、そこでは黄金の箱から蒟醤の葉に巻いた檳榔の実とともに、やはり樟脳の小片やパーリジャータの香水を取り出して噛むことが述べられている。

84）パーンに関する詳しい記述は、上流階級の嗜好を扱ったくだり［Ḥussain 2011: 130–133］になされる。遊女 (ṭawā'if) の章には、客を応接間に通すと先ずパーンを供すと述べられる［Ḥussain 2011: 186］。また同じ時期のラクナウーの遊郭を舞台にした小説『ウムラーオ・ジャーン・アダー』第 15 章冒頭でも、遊女が訪ねてきた老女にパーン (gilaurī) を作って差し出す場面がある。

85）P. nāmdār, 文字通りには「名を有した」「名高い」だが、ここではおそらく「執り行うべき儀式としてよく知られている」という意味で用いられているのだろう。

86）正確には Skt. palaṅga だが、新期インド・アーリア語の発音では語末の短母音 a を発音しないので、このように記す。以下同様である。

87）ṣulḥ kē jang kā. サンスクリット古典抒情詩では愛戯はしばしば戦闘に譬えられる。カーマ（性愛）・スートラには次のように言われる――「『カーマはその本質上争いであり、また劣悪な性質のものであるから、性交は一種の争いである。』と、人々は言う。愛打は情慾の劇しさによって行われるのであるから、性交の一部分である」［ヴァーツヤーヤナ 1998: 133］。
　『愛の花苑』の他の箇所にも同様の譬えが使われる。例えば 186 頁⑭詩節「今日、若いカップルの婚礼の寝台 (sēj) の戦闘 (Skt. sangrām) が行われた」、190 頁第⑦－⑧詩節「女は金の装身具など必要としていなかった。彼女自身が本来的に世界の殺戮者だったのだから。しかし猛者のこの、よく知られた美質は平和の時よりも戦いの日において、二倍になる」。

⑭　女は［ついに］独り身で孤独の状態[88] (birānī) を捨てた。自分が［どれほど恐るべき女の魅］力 (Skt. bal) を持っているか、まだ気づいていない［おぼこな様子が］可愛らしかった[89]。

⑮　幻術[90] を巧みに操って［男たちを］惑わせること (chand) を理解し、婀娜（あだ）の重みについての鑑定者となった[91]。

⑯　親愛 (yārī, yār) の美しさ［だけで］なく、彼女の冷淡さ (ağyār-pan) や狡猾さ (aiyār-pan) さえもが魅惑的に思われた[92]。

⑰　彼女は「和平」という名前［の意味を］戦争と考え、自分の影に怯えた[93]。

⑱　見知らぬ／異国の敵を信用させる (patyānā) のは難しくない。身内の見張りを懐柔することが難しい[94]。

⑲　彼ら［二人］は (unē)、愛 (pēm) の都［に蔓延（はびこ）る花の］蔓草を、策略 (nēm) の軍勢 (kaṭak) のように繰り出した[95]。

192 頁

①　こちらがスルターンの支配権を主張しようという計画を抱けば、あちらの方でも、このゲーム (bāzī) が自分の［有利になるように用意周到に］準備していた。

②　両軍から、覆い[96] を払い捨てて (ōṙ chōṙ) 攻撃した。互いをへし折り、捻じ曲げようとした (tōṙ mōṙ)。

③　襲撃の手 (dast) を伸ばしている時に、この対決から退いて引き返せば負けだ。

88）脚注によれば D. birānī = U. ‘bīgānah’. しかしダカニー語辞書には ‘parāī’「他人の女性、人妻」とあり、これを採るなら「女は［ついに］独り身の状態を捨て、他人の妻となった」となる。あるいは birahnī (Skt. virahinī)「（恋人との）別離を悲しむ女」の音変化した形である可能性もある。
もしくはむしろ、後続の詩節群における文脈から「女は、今までの親しげな様子を捨てて、よそよそしい態度を取り始めた」という風に解するべきか？

89）異読 sayānī「賢しさ」を採るならば「自分の威力について気が付いていない［幼さを捨て］それを十分に意識する［性的成熟に］達した」という意味になる。自分の性的魅力について意識していなかったあどけない少女は、今や自分の力を知った。Skt. bala「力、腕力」には「軍勢」という意味もあり、前詩節の「戦闘」という表現を連想させる。

90）Č.H.W.N.D.Y., おそらく Wāw 文字は短母音 u を示す記号で、chundē と発音するのであろう。

91）huī pārkhī nāz kī bhār sōṅ.「鑑定者」(pārkhī cf. Skt. parīkṣā, Pkt. parikkhā) とは、宝石や貴金属などの鑑定についての専門的な見識を備える者。ここでは、女性の媚態という貴金石を秤にかけて「重み」を量り、その価値を十分知っているということ。カーマスートラには、遊女の修るべき六十四技芸の中に宝石鑑定が含まれている［ヴァーツヤーヤナ 1998: 85］。古代インドの宝石鑑定 (Skt. ratna-parīkṣā, Pkt. rayana-parikkhā) については［Agarʼcand and Nāhʼṭā 1996］を参照せよ。
　なお、この半句は「婀娜の重荷 (bhār) により［幻術の］専門家 (pārkhī) となった」と解することもできる。その場合「重荷」とは、性的成熟年齢に達した女性の乳房や臀部などの重みのこと。これもサンスクリット古典抒情詩に用例がある。

92）男に対し優しくするだけでなく、わざとツンとしたりイケズをしたりして相手の心をがんじがらめにする術も身につけた。

93）今まで自分でも気づいていなかった女としての武器が自分に備わっていることを知り、自分で自分が恐ろしくなる、という意味か。これに酷似する表現が、ダカニー語辞書の bicaknā の項に例文として記載されている――bicaknē apan chāoṅ dēk ṭhāoṅ sōṅ［Jaʻfar 2008（Vajʼhī Phūlban からの引用）］.

94）apas pārkhī kōṅ manānā kaṭhin. 真の批評家・批判者は、敵方よりも、むしろ身内にいる。あるいは、前詩節の「自分で自分を恐れる」ということを参考にするなら、「自分の心の中にいる内なる批判者を宥め言いくるめることこそが難しい」という解釈もできる。

95）この詩節は意味が取りにくいが、愛の蔓草（恋人どうしの絡み合う愛情の比喩）が何本も生い茂るのを、両軍の何重にも連なる軍勢の隊列が衝突し交戦する様に譬えるのだろうか。印度古典抒情詩では男に絡みつく女が蔓草に譬えられ、性愛経典にも抱擁の名称として「蔓草の纏わり」が記される［ヴァーツヤーヤナ 1998: 110］。

96）D. ōṙ = U. ōṙh,「覆い、ヴェール」のことだが、戦争用語としては、何か軍勢を覆って防護するもの、簡易式の壁や柵などのことだと思われる。
　この詩節の後も、ヌスラティーは愛戯を描写する際に戦争用語を多用し、「和平（愛）」と「戦争」という二重の意味を持たせている。

④　その時の［吉なる］前兆 (šugun) を二倍にして測る[97]。その時の凶兆さえも吉兆と見なしてしまう。

⑤　こういう時の怒りは、愛情の化身である。［その怒りの］苦みの無いこと（＝甘さ）といったら、砂糖をはるかに凌ぐほどの美味である。

⑥　［女が］眉をしかめた際に生じる一本一本の皺は、幸運の梯子。それは幸運の王座［を示す］しるしの結び目[98] である。

⑦　卑劣さの中の卑劣さ[99] でさえ、優美である。気が触れたような譫言（うわごと）を聞いても耳に心地よい。

⑧　恋人の手［で与えられる］傷[100] (P. rēš) は、生命に喜びを与える。彼女の剣の前 (pēš) に、生命をも差し出す。

⑨　和平 (ṣulḥ) と方策 (sāziš) の努力も甲斐がなく、［戦争をするしかない、という］強情が心を占めた[101]。

⑩　双方とも、愛の儀式 (pirat rīt) の強情 (haṭ) を持って進軍した。愛欲の心 (madan dil) は増大し、激しい戦が始まった。

⑪　［兵の足取りは］繊細 (nazākat)［な仕草］のある所で躓き、そこで巻き毛の投げ縄をぐっと引き寄せた[102]。

⑫　流し目 (nayan kaj) をして、恥じらいという束縛を捨てた。何ものにも邪魔されない (nisang) 婀娜 (nāz) の大海原 (xuš samand) を高まらせた。

⑬　怒りに震え[103]、眉毛という弓に、流し目という矢をつがえ、あちこちの方向に射た。

⑭　彼女の［放った］矢が心に当たるごとに、すべて、恋い焦がれる気持ちにより、心が天がけるための翼に変じる。

⑮　繊細な指爪 (pl. nakhāṅ) は鋭く、血を流させる。情欲 (havas) という馬にとり、それは拍車 (mihmīz) であった[104]。

⑯　紅色の頬に爪が置かれると[105]、朝焼けの空に、か細い三日月［が浮かんでいる］ようだ。

97）脚注は nā-panā「無いこと」「拒絶 inkār」とするが、nāpnā「計測する」と読むのが妥当。戦いの凶吉占いでどういう結果が出ても楽観的に解釈する。幸先が良ければ、それを二倍にして、悪い場合は、それを吉兆として捻じ曲げて解釈する、ということ。仮に脚注に従うなら「その時の［望ましくない］前兆を受け入れず［吉として］二倍［の良さで］捉える」となるだろうが、あまりすっきりとしない。次の詩節と繋げて解釈すれば「女が拗ねているが、その怒り（つまり凶兆）さえもが甘美であり、魅力的で幸福感に溢れている」と、通りが良い。

98）忘れ物を防ぐ工夫として、袖に結び目を作ったりする習慣があった。

99）nikhōrī kī vah khōrnā. 脚注によれば nikhōrī, khōrnā ともに bē-murūvat「男らしさを欠く、フェアでない、卑劣な」の意味。愛戯の最中に狡猾な行為をしても、かえって魅惑的だ。あるいは、極度に猥褻でいやらしい仕草さえもが美しく感覚される。
　しかし、もし U. nikhōṙā ‘pitiless/cruel’ や U. nikhōṙnā ‘to pull off/to tear off/strip off/to skin’ を参考にするなら、「残酷な仕打ちをしても気持ちよい」とか「［衣服を剥ぎ取って］丸裸にする［という破廉恥な行為］さえもが素敵だ」という風に解釈できる。

100）　ペルシア語彙を用いているが、実際には古典印度性愛経典における「爪による引掻き」(nakha-kṣata) 等、性交中には苦痛が快感に転じる、ということを踏まえるのであろう。「傷」(P. rēš) は「（剣の）前に」(P. pēš) と脚韻を為すので間違いないが、もし P. rīš ‘the feathers of a bird’ と読むなら「恋人の手の羽毛［のような感触が］」という意味になる。これをも含意するか。

101）原文を直訳すると「和平と方策の仕事が退いてゆくにつれて、癒しがたい強情がやって来て頭の上に［場所を］占めた」。

102）美女の繊細で、なよやかな仕草を、歩兵の足もとを危なくする罠に譬える。敵を罠でよろめかせ、即座に美女の巻き毛という投げ縄を放って足を引っかける。

103）raj sōṅ mānd. D. raj < Skt. rajas, インド哲学で「激質」と訳される語。D. mānd < Skt. mand「疲れた」は文脈にそぐわないので、H. mānḍhnā ‘to stir up, to excite’ として解釈した。

104）印度性愛経典にいわゆる爪の引掻き (Skt. nakha-kṣata)。「情慾の昂進したときには、本質的には摩擦である爪による掻爬が行われる」（カーマスートラ 2,4,10）［ヴァーツヤーヤナ 1998: 116–121］。

105）男が爪で美女の頬を引掻くと。

⑰　暴虐の［尖った爪を持つ］掌 (panjah) が現れると、［人は / 民は］その上にたくさんの熱い涙を注ぐ[106]。

⑱　機会を捉えて (phabē bal tō)［つんと尖った］乳房 (Skt. kac) という短槍 (barchī) を［はっしと］掴んで (ghanā) 払い (jhāṙ)、勇敢さ (rāvat-panā) を垣間見せる (jhānk)[107]。

193 頁

①　しばらくの間、この作業に当たり、臥所 (sēj) という中庭は戦闘 (Skt. saṃgrām)［の場］と化した。

②　［天秤にかけられた］女の重し[108] は、急速に下がり続けた。上手の皿（＝男の目方）(zabardast kā pallah) は上がり続けた。

③　力づくで / 軍勢により[109] (bal sōṅ) 包囲した。美の都（＝女）は劣勢であった。

④　すぐさま占領しようと急いだ。そして一瞬のうちに征服した。

⑤　恩寵［により恵まれた］鍵で、扉を閉ざした秘密の宝物庫を開き、宝石を手にした (guhar-sanj huā)。

⑥　槍を操る術の巧みさを見せつけて、指輪をあっさりと手に入れてしまった[110]。

⑦　しなやかな［槍さばきの］手 (dast) の技 (hunar) で[111]、まだ成熟していない (šaṣt)［処女］の (kē) 赤熱した石炭を (angārē kōṅ) 刺し貫いた (barmā kiyā)。

⑧　愛欲の神 (madan) は遅れを取らずに力を込めて［弓をぐいと］引き絞り、［硬い］白楊の矢 (tīr-e-xadang) は子安貝 (kaurī) を見事に射抜いた。

⑨　彼は、女[112] という歓楽の園における魔術師である。なんとまあ[113]、［巨大な］駱駝を針の穴に通してしまった！

⑩　比類なき仮想の点 (nuqṭah-e-mauhūm) があった。それを［巧みな］テクニック (fann) により運命・幸運 (qismat) を享受するものとした (kiyā qismat-paẕīr)[114]。

⑪　一輪の新鮮な花が芳香を得て、蕾を開き、園は潤いに溢れた。

106）P. panjah は、猛獣等の、五本の尖った爪のついた掌。男という獣の鋭い爪で鷲掴みにされ、切り裂かれて、女は、苦痛と快楽の入り混じった熱い涙を流す。

107）D. ghanā を「つかむ」こと (< Skt. grahaṇa) として解釈したが、不明。U. ghanā「濃厚な、分厚い、密集した」という語も存在するが、文法的な辻褄を合わせにくい。乳首がつんと尖った乳房を短槍に見立てると解釈したが、カーマスートラやそれに基づくサンスクリット美文学では、爪の引掻きの記述の中で、男の爪が女の乳房に突き立てられて傷が生じることが述べられるのが普通。むしろ「爪という短槍を分厚い (ghanā) 乳房に突き立てて」というような内容が期待されるところであるが、前半句をそう解釈するのには無理があろう。なおパンジャービー語のスーフィー物語詩『ヒール・ラーンジャー』には、女性の乳房を剣に譬えていると解釈できる箇所がある［北田 2015: 17 脚注 50］。後半詩句は難解であるが、暫定的にこの様に訳しておく。

108）tōl-pan dhan kā. 直訳すると「女の目方 (tōl-pan)」。U. tōl とは、天秤で計量した目方のこと。「皿」と訳した語 P. pallah も「天秤の片方」を意味するから、ここでは天秤で二つのものの目方を量り比べることがイメージされているのであろう。見た目は男のほうが上手（うわて）で、のし上がっているが、実際の目方は、沈み込む女のほうが重い、というのが面白い。

109）Skt. bala には「力」「軍勢」の両方の意味がある。

110）槍と指輪は性器の象徴。

111）P. šaṣt は数詞「六十」であるが、脚注は šaṣt を nā-taiyār「まだ成熟していない」の意味に取る。なおペルシア語 angārah には「帳簿、歳入簿」「描きさしの絵、スケッチ」等の意味があるが、この文脈にはそぐわない。

112）異読 dhan を採る。

113）文末の yār を呼格・一種の感嘆詞「嗚呼あなた、御覧なさい」と解釈した。

114）P. nuqṭah-e-mauhūm ‘an imaginary point’［Steingass 1996］. イスラム天文学における重要な仮想の天体 (nuktah ‘point’) を Qismat と名付けることを踏まえる。Qismat は Kūšyār 作『天文学入門』(*Kitāb al-madxal fī ṣanā‘at aḥkām al-nujūm*, 2, 12, 10) に次のように定義される――“That degree and minute are set in motion from Pisces in degrees of the equator, one degree in every solar year. This is called the degree of qisma.”［Yano 1997: 143］. P. qismat-paẕīr 原義「運命を受ける」は、ここでは「命中した」というような意味を持つか。

⑫ ［硬い］金剛石[115] の杖を鉱床（穴）にすばやく突っ込み、ルビー色をしたひとつの泉を生じさせた。

⑬ ジャスミン (suman) の花びらが［深紅の］チューリップに変じた。清浄なる月に、赤い暈（かさ）が掛かった。

⑭ 彼の［魔法の］タッチ／魔法の石 (paras) により、シリーシャ (siras) の［緑白色の］花は、［赤い］阿仙薬の液 (ṭarḥ-e-madan) に変じた[116]。純銀 (nuqrah-e-xām) は純金 (Skt. kundan) のようになった。

⑮ 彼は比類なき水銀［を注ぐこと］によって短時間のうちに色美しい／紅色の (su-rang) 金貨／封印 (muhur)（= 処女性の比喩）から“太陽の翼” (sūr bāl) を作った[117]。

⑯ 弓術の奥義 (dhanur bhēd)[118] の［最］難関の不死の奥義 (amar bhēd)［を修行すること］により、“太陽” (P. xuršīd) から“満月” (sapūran < Skt. sampūraṇa) が昇り現れた[119]。

⑰ 澄んだ月に対して、［紅の］朝焼けが生じた。朝焼けの澄んだまばゆさに四方は真っ白になった。

⑱ 勇者 (sūr) はめでたく戦場の勝利者となり、愉悦 (sukh) の大いなる昂奮／勇気 (umas) を［心の底まで］感覚した。

⑲ 彼女の［身に着けていた］装身具・衣 (D. abrahan < Skt. ābharaṇa, āvaraṇa) は［多くの］美点を備え、唯一無比であったが、［それらの装束も、二人で］もみ合っているうちに (jhūmā jhūm mēṅ) 寝台の周囲に放り棄てられた。

194 頁

① 髪を束ねて結んだリボンは解（ほど）けて頭からハラリと落下した。幻術／魅惑 (chand) の盾 (sipar)

115）タントラにおいて金剛石 (Skt. vajra) は男性器の象徴である。

116）U. siras/siris < Skt. śirīṣa は植物名。ここでは paras と韻を踏むので siras と発音する。Platts 辞書［2004］はこれを ‘*Acacia* (or *Mimosa*)’ とするが、西岡［1988: 189–191］、古賀・高橋［2006: 1354］ともにマメ科ビルマネム (*Albizzia lebbek*) とする。西岡［上掲箇所］によると、ネムノキの花に似て、淡い緑白色の長い雄しべを房のように束ねた形の花をもつ。D. madan 原義「愛欲」あるいは ṭarḥ-e-madan「愛欲の一種」は、脚注によると jawānī ‘ajowan’ アジョワン・スパイスのことだという。しかし Platts 辞書［2004］によると、植物名としての H. madan は *Vangueria spinosa*（アカネ科の低木）, *Gardenia dumetorum*（アカネ科クチナシ属の一種）, the thornapple = *Datura metel*（ナス科チョウセンアサガオ）, *Acacia catechu*（マメ科アセンヤクノキ、亜仙薬木）等の様々な植物を表す。もし thornapple なら、麻薬性の果実である。*Acacia catechu* なら、それを嗜好品パーン（キンマ）に包んで噛んだ時に唾液と混ざって生じる赤褐色の汁（阿仙薬）を意味する。女性の口にパーンを含ませることは、性行為の象徴である。なお ‘Abdulḥaqq 版本脚注のアジョワンという説であるが、アジョワン・スパイスには消化促進効果がありパーンに包まれることもあるので、こう解釈したか？

D. paras < Skt. sparśa ‘touch’ には U. pāras「接触した金属をなんでも黄金に変えてしまう魔法の石」という意味もあり、この意味との掛詞になっている。「彼の魔法の石（= 男根）により」。錬金術の比喩は次の詩節でも扱われる。

117）精液を水銀に譬え、おそらく錬金術における何らかの操作のことが述べられているのであろう。D. sūr bāl, 字義通りには「太陽の翼」あるいは「勇者 (sūr) の翼」だが、不明。錬金術の用語か？ Platts 辞書［2004］によれば、P. muhur には「金貨」以外に「封印」転じて「処女性」という意味もあり、ここではそれが掛けられているのだろうか。

M.H.R. を P. mihr ‘sun’ と読むこともできよう。なお、Skt. bāla「子供」「幼い」は、bālārka-, bālāruṇa-, bālātapa- 等の複合語において、日の出の太陽の光のまばゆさを言うのに用いられ、それを参考にするなら sūr bāl を「若く無垢なる［日の出の］太陽」と解することも可能だが、いずれにせよ決め手に欠ける。

118）「弓術の奥義」(dhanur bhēd) は「弓術のヴェーダ聖典」(Skt. dhanur-veda) の転じた表現で、サンスクリットの弓術指南書を指す。ちなみにカーマ・スートラ［2, 4, 10］の性交編・爪傷の記述においてはダヌル・ヴェーダが例示として言及される――「情熱の際にも、人はまことこの技巧（= 爪傷）の種々あることを欲し、またこの技巧の多種多様であることによって双方の情熱は昂められる。［…］射術の聖典（ダヌル・ヴェーダ）などの武器の使用に関する諸種の論典に於いても、まさしく種々の技術が必要とせられる。況んや、今の場合には猶更のことである」［ヴァーツヤーヤナ 1998: 119］。

119）「太陽」と「満月」はおそらくハタ・ヨーガの“太陽”（下腹部のチャクラ）と“月”（頭蓋のチャクラ）を指す。この時代、弓術・武術がハタ・ヨーガと結びついていたことを示唆する。“太陽から月が昇る”とは、タントラの儀礼的性交において、精液（あるいは精液と経血や愛液の混合物）を脊髄（スシュムナー管）に沿って頭蓋まで引き揚げ、愉楽（大楽 mahārasa）を得る、ということを踏まえる。弓術は射精の、月の出現はオーガズムの比喩であろう。

である鏡は落下した。

② 頭からは、真珠［を編み上げた］網状のヴェールは切れて［落下し］、手からは、［真珠あるいは水晶の］玉［を繋いで作った］高価そうな手袋が［ほどけて］バラバラになった。

③ 黒髪という［夜］空 (Skt. gagan) からは［たくさんの］星のような花々がことごとく散り落ち、ベッド一面に一つ一つ［繋がったままで］引っかかっていた。

④ 頭から髷 (chōṭī)［を結わえる］バンドが解け、真珠の緒が切れ、ほうき星の様に［一瞬］出現し (nikal) 髪の分け目 (māng) を流れ落ちた[120]。

⑤ 髪の毛が黒雲の様に両側に分かれ、月と太陽［のように円く輝く］両の頬に掛かり覆った (jhāṅp ghāl)[121]。

⑥ さらに (magar) その雨の雫(しずく)の粒 (baras xvai)[122]がもの凄く［降り］、森の花園を一面に濡(うるおし)らした。

⑦ 両方の耳［の／という］二つの清げな星宿 (burj) には、星々の粒が隠されている。筐(はこ) (durj) の中に収められた宝石 (ratan) のように。

⑧ 昴(すばる)星[123] (ṣuraiyā) はきらきらとした輝きの源泉を離れて［散り散りに］なった。耳［につける］花 (karan phūl)［という］“二匹の子牛”星 (A. farqadain) は［切れて地平線に］沈んでいった (dub rahē)[124]。

⑨ その挙句に (ta-lak)［不動のはずの］北極星[125]［さえもが、なんとかして］落ちようと頑張る。鼻［に着ける金の］鎖［に嵌められた］貴石[126] (nag) は［固定されて動かないはずなのに］まばゆいカノープス星 (suhail) のように、散り落ちてしまった。

⑩ 全身の［しっかりと固定されていたはずの］貴石 (nag) が全て、このようにはずれて落ちてしまい、まるで“棺桶”(na‘š) から美しい“娘たち”(banāt) が逃げていくかのようだった[127]。

⑪ 首から外れてしまった頸(くび)飾りは、［月に掛かる］暈(かさ)が月から離れてしまったかのように見えた。

120）chōṭī band を cōṭī band「髷のバンド」と読み替える。「髪の分け目」(māng) とは、女子が髪を真ん中で分けたときにできる線をいう。夫のいる婦人はここに赤い粉で線を引く［加賀谷 2005］。婚礼の際には、この分け目に沿って豪華な細長い飾りを垂らす。これが解けてストンと落下したのである。なおアラビア文字列 M.A.N.G. の代わりに M.A.N.K. つまり mānik「宝石」と読むことも可能。その場合、後半句は「宝石の滝 (mānik jhaṙ) が、ほうき星の様に流れ落ちた」となる。

121）D. jhāṅp を「覆う」という意味の動詞語幹として解釈したが、脚注は名詞 pardah「帳、カーテン」とする。これに従えば「月と太陽［のような］両頬にカーテンのように掛かった」と訳せる。

122）頬に浮かぶ汗 (xvai) の粒を雨粒に譬える。

123）194 頁第⑦詩節と第⑧詩節は全体として両耳の飾りを述べているから、“昴”も耳飾りの一種であろう。Platts 辞書［2004］によると ‘aqd-i-ṣuraiyā「昴の結び目」とも呼ばれる。小さな星が多数群れているのを「結び目」と表現する習慣があるので、装身具の緒が切れて宝石が散り散りになる様子を星の群になぞらえるのが、なおさら的を得ている。

124）Steingass 辞書［1996］によれば A. farqadain「子牛（双数）」とは、小熊座 (Lesser Bear) の極近くの二つの星のこと。dub rahē を U. ḍūb rahē と解釈した。なお、farqadain との関連からアラビア文字列 D.B. を A. dubb「熊、大熊座／小熊座」と読む可能性も否定できないが、どうであろうか？

125）前詩節（194 頁⑧）で、小熊座付近の“二匹の子牛”星に言及し、それとの連想で、北極星に言及する。

126）nath kā nag. H. nath, 鼻にピアシングをして垂らすアクセサリーの鎖。H. nag は指輪などにしっかりと嵌められ固定された宝石を言う。その語源は Skt. na-ga「不動」であり、ここではそれを踏まえて「固定されて動かないはずの貴石が、ずれ落ちた」というのである。アルゴ座のカノープス星は、太陽を除くとシリウスに次いで二番目に明るい恒星。赤い色をしているので、おそらくここではルビーを譬えているのだろう。カノープス星は梵語ではアガスティヤ Agastya 聖仙に同一視される。『占術大集成』*Bṛhat-saṃhitā* 第 12 章には「アガスティヤの振る舞い」という題で記述される［ヴァラーハミヒラ 1995: 78–82］。アガスティヤ星は夜明け前、太陽に先駆けて現れるが北半球ではさほど高くまでは登らない［Yano 1994: 233ff］。

127）Platts 辞書［2004］によれば A. na‘š「棺桶」「亡骸を乗せて運ぶための担架」とは、大熊座あるいは小熊座を言う。「棺桶の娘達」(banāt al-na‘š, banāt-e-na‘š) とは、大熊座あるいは小熊座に先行する三つの星のこと。性交の後、疲れ切ってベッドに横たわる女性を棺桶あるいは担架に横たわる亡骸に譬える。

⑫　髷 (chōṭī = H. cōṭī) に巻きつけた四条の環飾り[128] (causarī) と冠［に巻き付けた］花輪[129] (mukuṭ māl) は全て、海獣 (makrī) の“頭” (ra’s) と“尾” (ẓanab) のように見えた[130]。

⑬　胸の上には真珠のネットを掛けており、それは天空の星々よりも高らか[131] (‘ālī) であったが

⑭　［性交時の］押し合いへし合いの衝撃で玉の緒からは真珠が悉く彗星のように［滝と］流れ落ちてしまった。

⑮　［重く太めの］腕輪 (kařā) 細い腕輪 (cūř) 手首飾り (gōṭh) 金の腕輪 (kagan) は［滑り］落ち、寝台という大空 (Skt. gagan) いちめんに［たくさんの］三日月［の様に散らばった］[132]。

⑯　腰 (lung) からはベルト (ḍāb) が外れてしまい (dhar tīṅ xurūj)[133]、天空から黄道十二宮 (burūj)［の帯］が切れて[134] (tuṭ) 落ちてきたかのようだった。

⑰　足［首に着ける］鈴は［春の］季節の［到来を告げる］比類なき足飾り。［そのたくさんの鈴が外れて］［婚礼の］部屋 (mandhir < Skt. mandira) の四方にぐるりと散らばっていた。

⑱　身には心を奪う美しい色の（紅の）花嫁胴着 (cūlā) を着ていたが、その金色に輝く衣服もばらばらに破け裂けて散らばっていた[135]。

⑲　そのとき適齢期の女 (jauban-matī) はプライド (Skt. mān) を失い、夫婦[136] は和平を取り戻そ (kicvā = khiṅcvā) うとした。

⑳　しかし彼ら［二人は］愛欲 (Skt. madan) により酔っていた。欲情 (havas) という酒姫 (sāqī) とともに手を組んで (ham-dast) いた。

128）D. cau-sarī は四条・四帯状の環飾り (cf. U. cau-larā ‘a necklace of four strings or rows’)。四つの環飾りを束ねたものだろう。chōṭī causarī, 文字通りには「小さな四条の飾り」で、首飾り等を言っている可能性もあるが、ここで「冠」(mukuṭ) と並んでに用いられており、194 頁第④詩節で chōṭī がおそらく cōṭī「髷」の意味で用いられていることを考えると、ここでも髷に巻き付けた環飾りを意味するのだろう。

129）冠に巻き付けた花環あるいは金銀宝石細工の環飾り。ただし、194 頁第⑭詩節の脚注によれば mukuṭ は真珠を意味し、それに従うならこの詩節で言われているのは必ずしも髷や冠に巻いた環飾りではなく、小さな四条の首飾りと真珠の首飾りを意味することになる。

130）U. makrī は「蜘蛛」を意味するが、文脈から Skt. makara「磨羯」「海獣、海に棲む怪物」を指すと思われる。インド天文学では、天球上の胴体がなく頭と尾だけになった海獣（竜）が、太陽や月を呑みこむことにより、日蝕・月蝕が引き起こされるとされる［矢野 2004: 76f］。ペルシア天文学にも同様の説があり［矢野 2004: 105ff］、この詩節では、これら二つの文化圏の説が混淆している。環飾りが切れて真ん中の玉や花が全てはずれ落ち、両端の飾りだけしか残っていない様子を、海獣に譬えた。ペルシアのブレスレット等の両端が、獅子や海獣などの頭部をあしらった意匠になっていることがあるが、ここでもそういったものを念頭に置いているのか。なお H. magar < Skt. makara「鰐（わに）」はワニ形の耳飾りをも意味する［加賀谷 2005］。おそらく、ヌスラティーの原文で M.K.R.Y. (makarī/magarī) と綴られていたのを、書写生が判読できず、M.K.Ṙ.Y. (makrī) に改変したのであろう。写本 Phil. M. (Folio 219a, l. 6) では Ṭ.K.R.Y. (ṭukrī = H. ṭukrī)「破片」となっており、こちらの読みを採るなら「全て“頭”と“尾”のようにばらばらになって見えた」と訳せる。

131）高貴な輝きを放っていた、あるいは文字通り、天球のごとく丸い乳房の高まりの上にあった。

132）様々な種類の腕飾り・手首飾りを言う。環飾りが手首から滑り落ちてベッド一面に三日月の様に散らばった。H. karā < Skt. kaṭaka は金属の（重い）腕輪。D. kagan = H. kangan < Skt. kaṅkaṇa は金の腕輪。D. gōṭh = H. gōṭ は手首に着ける金属製あるいはラック製（塗料を塗り固めた）環飾り。D. cūř は今日でもチューリー (H. cūrī) と呼ばれ、女性に愛用されるガラス製・金属製の細い環飾り。細い環を 5 本～10 本程度重ねて手首に着用する。チューリーは細く繊細な作りなので割れやすく、実際に三日月の形に似るのだろう。

133）D. dhar「側面」(‘jānib/simt/ṭaraf”) という意味を採れば「ベルトが側面から外に［はずれてしまい］」つまり、ベルトが外れてベッドの側面から外に落ちてしまう。あるいは D. dhar/dhartī「大地」という意味があり、後半句の「天空」(āsmān) との対比になっていると考えれば「地上では［女の］腰からベルトが外れてしまっているが［これに対し］天空では黄道十二宮［の帯］が切れて落ちた」と解釈できる。なお lung を脚注は「腰」の意味とするが、P. lung は「腰に巻く布」（ルンギー）のこと。これを採れば「［女の］腰布からベルトが外れてしまい」と訳せる。

134）文字列 T.Ṭ. を taṭ「陸地、岸辺」と読めば、「黄道十二宮［の帯］が陸地 / 岸辺に落ちてきた」となる。

135）赤色に錦糸を混ぜて織った、非常に薄い絹製の花嫁用の衣装。高価だがすぐに破けてしまう。それが初夜に引き裂かれるのが、なおさら目出度い。

136）dhan patī. 文字通りには「富の持ち主」だが、おそらく Skt. dampati「夫婦、夫妻」のこと。D. dhan が「女性」を意味することからの類推によりこの語形に変化したのであろう。愛戯という戦争が終わり、女軍はプライドを捨てて降参し、男軍との和平を取り戻そうとした。

195 頁

① 全世界[137] は吉祥なる断食 (rōzah-e-sa‘īd) を終えた。一瞬一瞬、常に十万の［はかり知れない］悦楽の祭日 (‘išrat kī ‘īd) だった。

② ［女の］唇というルビー製の酒杯に不死の美酒（アムリタ）が満たされ、［快楽（けらく）に］消耗した身体 (jīo) の［渇きを癒す］清涼飲料（シャーベット） (šarbat) となった。

③ 別離 (birah)［の苦悩］の火が身と心に燃えていたが、［アムリタを］ごくりごくり (ghuṭ)[138]［と飲むごとに］何十万もの（＝無量の）冷涼感が生じた。

④ 彼／彼女の眼差しは、心の望み (maqṣūd-e-dil)［を一目見たいと願う］眼差しであり、彼／彼女の若さ (jauban) が切望 (šauq) に力を与え［強めた］[139]。

⑤ 欲求 (ṭalab) が切望 (šauq) を掻き立てれば掻き立てるほど、［美女の］長き巻き毛が、その文書 (dastāvēz) となった[140]。

⑥ 眼は美の恩恵に飽き足らず、眼は、色艶 (chab) の塩 (namak)[141] を［熱心に］味わった。

⑦ 激辛のせいで (tēzī tī ati) 顔を顰（しか）める (turš-rū) 者にとり、それ（＝美）は酢（甘酢） (sirkah) のように心地よかった[142]。

⑧ ［美女の］唇から出た激辛の言葉は、彼にとり、酒杯いっぱいに注がれた蜜酒のようだった[143]。

⑨ その人の（＝恋する男の）苦痛は、大いなる心の悦びに変じる[144]。［美女の］ことを意識するだけでも、意識を失って［悶絶した］。

⑩ その人（＝美しい御方）が不機嫌になっても［恋する男には］愛しい気持ちがこみ上げる。その人（＝恋する男）が泣いても、（美女には）笑いが［生じる］[145]。

⑪ 理性 (augam)[146] は水仙 (nargis) の様にほろ酔い加減になり、あまりの熱情の高まりに、知性 (gyān < Skt. jñāna) の支え (tam) は消し飛んだ。

⑫ さらに、この婀娜っぽい女 (nāznīn) の［見せる］涙の水は、欲情という庭園を再びみずみずしく潤した[147]。

⑬ 艶っぽい会話 (rangīlī bātēṅ) や色彩と味わい (rang ras) が、美の素晴らしき黄金の［純度を試

137）janam jag kā. 文字通りには「世界の誕生」。

138）D. ghuṭ = H. ghūnṭ.

139）青春期の若さが、性的欲求という炎に油を注いだ。

140）A. ṭalab「欲求、要求」は、法廷用語としては「召喚」という意味になり、それを掛けてある。法廷に召喚する文書（出頭命令書 P. ṭalab-nāmah）が発行され、恋する男を愛という法廷に出頭するよう命令する。その文書は、黒い巻き毛というインクで書かれた文字である。

141）P. namak「塩」「塩味」は、味の決め手、美女の「魅力」をも意味する。

142）次の第⑧詩節との並行表現になっているとすれば「［美女が］激辛（恐ろしく不機嫌になって）顔を酸っぱくしかめる場合でも、［恋する男にとっては］甘酢（酢入りの清涼飲料）のように心地よく感じられる」という風に解釈することもできる。

143）美しい女が拗ねて繰り出してくる辛口発言が、かえって愛と情欲を掻き立てる。もっとキツイお叱りをお願いします、ということ。

144）カーマスートラには、性交時の昂奮状態においては苦痛が快楽として感覚される、と述べられる。あるいは「こっちの人（求愛者）にとっての苦悩は、あっちの人（美しい御方）にとっての心の楽しみか憂さ晴らし。あっちの人（美しい御方）は正気をたもって冷静だが、こっちの人（求愛者）は正気を失う」という風にも解せる。

145）ペルシア古典詩でよく見られる恋する男女の関係性。冷淡にされて求愛する男が辛くて泣きだすと、傲慢なる美人はそれを嘲笑し楽しげにしている。あるいは逆に「美女が泣く際に（その泣き顔がまた可愛らしくて）男が愛おしそうに微笑む」とか「感極まって女が泣くのを見て男が満足げに微笑む」などとも解釈できる。こちらはペルシア古典詩の型からは外れるが、後の 195 頁⑰詩節–196 頁①詩節では、性交と快楽の激しさに女が苦しむことが述べられており、むしろこの解釈の方がそぐう。

146）文字列 A.W.G.M., ダカニー語辞書には記載されないが、文脈から判断して、おそらく Skt. avagama「理解力」。

147）再び情欲を掻き立てた。

す］試金石 (paras) となった[148]。

⑭　花のような身体をした美女 (gul badan) の傍に居た人は誰しも、その香りに薫じられ、芳香を放った。

⑮　二人において、それぞれ相手から［受け取った］光[149] (nūr) が上昇した。女は月の様に、男は太陽の様に［幸福な光に包まれ恍惚としていた］。

⑯　このような光［を放つ］月は昼になっても沈まず、このような陽光により［漆黒の］夜には金箔が貼られた[150]。

⑰　あまりに暑かったので、女は身をよじらせ、あらゆる瑞々しい花々の一輪一輪が花の露 (gulāb)（＝汗の雫）を滴らせた。

⑱　それらの［たくさんの］汗 (xvai) の雫の蒸気 (bhāṅp) が体の［表面］上にくっつき、宝石の象嵌された背の高い糸杉の柱のように見えた[151]。

⑲　女には、極上酒 (param mad) の酩酊状態が生じ、自分で自分を忘れてしまった。

⑳　汗が次から次へと湧き上がり、そこ（＝汗の池）に飛び込んで沈んでしまうほどだった。

㉑　彼女に対し憐みの心を抱い［て救出］しなくてはならなかった。彼女が溺れて沈んでいこうとするのを引っ張り上げなくてはならなかった[152]。

㉒　［男は女を］抱きしめて、元気づけようと (dhīrak sōṅ) 手を差し伸べて、様々な仕方で慰めた。

196 頁

①　究極の遊戯 (param khēl) の強い衝撃力 (dāo kā bal) に［押し流されて］女は耐え切れず、「意地悪！」(kaṭhin) と言って男をなじった[153]。

②　［男は女に］愛の果汁 (pirat ras)[154] を飲ませて恍惚（うっとり）とさせ[155]、しばらくの間 (kōī gharī)［彼女の］身体に寄り添っていた[156]。

③　そのままお互いの腕を［絡み合わせてお互いの首に巻きついた］ネックレス［の様に］して、唇に唇を重ね合わせながら、一緒に歓びを分かち合った。

148）H. paras はもともと試金石のことだが、ここでは触れる物すべてを黄金に変える魔法の石を言う。さりげない会話やちょっとした仕草さえもが、恋の感情の高まりにより美的に感覚される。

149）交接時に男女間で交換される愛のエネルギー、恍惚感を言うか。

150）夜を黒地に見立ててそれに金箔を貼る、という発想は、漆器に施した蒔絵を思わせる。［羽田 2017: 287］には、東インド会社によってオランダに輸出された 17 世紀後半の日本産漆器（蒔絵箪笥）の写真が掲載されているから、そうしたものが同時代のデカンにももたらされていて、このような比喩の発想減となった可能性があるが、もちろん確証はない。

151）美しい人のすらりとした姿は糸杉に譬えられる。美女の体中に水晶のような汗の雫が浮き出ている様が、水晶の粒をたくさん嵌め込んだ糸杉の柱に似ている。「蒸気」(bhāṅp) は、ここでは水蒸気が凝結した水滴のことを言う。

152）表面上は、溢れ出す汗の水溜まりに溺れ沈もうとするのを、となっているが、つまり、快感に我を忘れて気絶しようとするのを、気を付けさせた、ということ。

153）カーマスートラ［2, 7, 15–16］愛打の記述において「愛打は痛さを与えるもの」であるから、女は様々な雉鳥・郭公鳥の鳴き声など様々な種類の叫び声 (Skt. śīt) をたて、「お母さん」という意味の言葉、禁止を意味する言葉、「もうよい」という意味の言葉その他を用い、そして「性交の終りに於いて、女は溜息をつき、泣く」［ヴァーツヤーヤナ 1998: 134f］。

154）愛の快感。ras < Skt. rasa「果汁」は印度古典美学において美的快感を表す用語であるが、カーマ・スートラには「性的快感」を意味する語としての記載がある。岩本は「快美感」と訳す［ヴァーツヤーヤナ 1998: 105］。

155）bhūnd kar. D. bhūndnā ‘dhōkā dēnā’［Ja‘far 2008］「騙す、欺く」。ここでは魅了させる、呆然とさせる、ということ。

156）rahyā … hō tis kē jīo kā garī. 脚注は D. garī ‘muḥabbat’「愛情」とするが、ダカニー語辞書［Ja‘far 2008］によれば D. garī ‘dōst’「友人」。直訳すると「生命／心 (jīo) の友となっていた」となる。一体（一心同体）となっていた、という意味か。

④　この二人の望みを叶えた如くに、神様は全ての人に (sab par) はかり知れない慈しみを垂れたもうのです。

4.『愛の花苑』における接吻と愛撫

初夜の濡れ場についての記述の他に、作品の中盤にも、主人公のカップルが初めて接吻する場面を描いた短い記述がある――

マンハル王子は長い冒険の後、灼熱の荒野の果てに、巨人が守る緑の園に辿(たど)り着く。そこで、夢に見て以来ずっと恋い焦がれていたマドマーラティー姫が囚われの身にあるのを発見する。王子は巨人と戦ってこれを斃(たお)し、姫を故郷の王国に送り届けてやる。王宮の庭園の茂みの中で、二人は愛撫しあう。

＊ ＊ ＊

150 頁

⑫　彼女 (un)[157] は青春から［授けられた］得難い (D. autār)[158] 果実(くだもの)をもぎり取り、隠しておいてあったのを、懐／胸 (chātī) から取り出し[159]、

⑬　旦那様 (sāiṅ) に逢って、躊躇することなく、それを贈り物として差し出した。

⑭　彼 (un) は手を、彼女の心のしるしとしながら[160]、くちびるにくちびるをかさね、輝かせた (kiyā dirafšān)。

⑮　不死の旨酒（アムリタ）の杯がなみなみ (labālab)[161] と満たされ、ゴクリ (ghuṭ) とひと口飲んで、あらゆる苦味（憂い）を忘れた。

⑯　ある時には眼に (cak kō) 心を魅了するアーモンドが生じる[162]。［また］ある時は色艶 (chab) という林檎が心に (dil kō) 安らぎを与える[163]。

157）D. un = H. unhōṅ nē, 複数形だが、続く第⑬詩節の内容と合わせると女性・単数「彼女は」という意味に取るべき。

158）jō autār phal un javānī tī pā. もし A.W.T.A.R. を utār と読めば「青春から果物を［採り］降ろして得て」となろうが、関係代名詞の位置および動詞語幹 pā があることから判断して形容詞 autār「得難い、殊勝なる」と取るのが妥当。

159）今まで心にしまっていた思春期の情熱をあらわにし、ということだが、衣服に包んであった乳房という果実を取り出して、という意味を掛ける。

160）kar un dast tis dil kī karnē nišān. ただし活字の様子から判断して、karnē は kartē のプリントミスらしい。kartī である可能性もあり、その場合には主語は女性「彼女」。いずれにせよ男あるいは女のどちらかが掌を相手の胸に置いたのだろう。ダカニー語では能格構文はあまり使われず、通常、他動詞の完了分詞は主語の性・数に一致するから、素直に解釈すれば「輝かせた」(kiyā dirafšān) の主語は男性である。唇を輝かせた、とはつまり、愛情で火照らせた。

161）P. lab は「唇」と「杯の縁」の両方を意味し、P. labālab は「杯の縁に溢れんばかりになみなみと」という意味だが、ここでは「くちびるにくちびるを（合わせて）」という意味も掛ける。熱き接吻を交わしたのである。

162）D. cak < Skt. cakṣus「眼」。直訳するとこうなるが、いささか不自然。アーモンドとはなんだろうか。前半句は cak kō「眼には」後半句は dil kō「心には」と対句を為す。
　しかし、可能性は低いが K.W. を kau とも読め、D. kau ‘kab, kōī’ の意味であるから、そうとってよい場合は「［恋人の］眼 (cak) はなんだか (kau) アーモンド［のよう］になった」と訳せる。また、もし cak を動詞語幹と解釈して cak kū = H. cakh kar と読むならば、「味見すると (cak kū) ある時は心を魅了するアーモンド［のようなカリッとした香ばしさ］が生じる」と訳せ、接吻の際に相手の唇を歯で軽く咬むときの快感を言っていることになる。

163）「色艶」と訳した語 chab < Skt. chavi は「光沢」「視覚的な輝き」を意味する。恋人の顔や身体が輝くように美しいことを言っているが、林檎は乳房の比喩でもあり、エヴァがアダムに与えた果実をも仄めかす。このように様々な連想が交錯するものの、この文脈では直接的には接吻を描写しているから、唇が林檎の赤い色や甘さを彷彿とさせる、ということか。

⑰　［咬む度に］口にはピスタチオ[164] の美味 (laẓẓat) が何度も何度も (bār bār) 生じた。柘榴の粒（歯）は心 (jīo) にひんやりとした［歓びを］与えた。

⑱　チャンパー花の［白い］蕾は魂を好い香りにし[165]、酒業者たち (kalālān)[166] は棕櫚（しゅろ）［の蒸溜酒］(munjalī)［でもって］心／気持ち (tab‘) を楽しく (rangīn) する[167]。

⑲　ある時はヒヤシンスの園 (sumbulistān)（＝カールした髪の毛）を散策し、ある時は蜜蜂 (bhaṅvar) となって薔薇園 (gulistān)（＝馨しい口あるいは顔）を巡る[168]。

⑳　互いの身体を一つに重ね合わせている。この合一の状態において恥じらいは燃やし尽される。

㉑　この二つの楽音／旋律 (sūr) は［和して］二つだという区別がなくなり、お互いがお互いに［溶け込んで］一つの光の中にひたっていた。

＊ ＊ ＊

かくして、夢で見た相手に現実の世界で会うことができ、めでたく物語は大団円を迎えるか、と思いきや、過酷なる運命はそう簡単に幸福を与えない。マドゥマーラティーがこっそりと異国の王子と契ってしまったのが、母親サリーカー王妃にばれてしまう。王妃は、娘がしでかした不実により家名に傷がつくことを恐れ、魔法の薔薇水を取り出し姫にかけて呪文（マントラ）を唱えると、姫は極彩色の羽をもつ鳥に姿を変えてどこかへと飛び去ってしまう。姫を探し求めて、王子マンハルの旅はさらに続くのである。

5.『愛の花苑』ヌスラティーの著作のきっかけ

ヌスラティーは作品冒頭（宗教的賛辞に続く部分）で、この作品を著す切っ掛けとなった出来事について述べる。この記述から、著者および著者を取り巻く同時代の人々の、ダカニー語に対する思い入れを読み取ることができる。

以下に載せるものは、本稿の他の箇所の訳文とは違って、必ずしも原文に忠実な訳文とはなっておらず、各詩節の内容を分かりやすく意訳したものである。本来は厳密な訳文を載せて分析を行うべきであろうが、別の機会にしたい。

164）接吻の味は 151 頁⑧詩節でもスナックに譬えられる。「酒姫の唇という酒杯に対する切望があった。接吻の一回一回が、多大な欲情 (kām < Skt. kāma) のスナック (nuql) だ」。A. nuql とは、Platts 辞書［2004］によると、酒のツマミとして供されるフルーツや菓子、メロンの種子から作ったデザート (comfits) など。Steingass 辞書［1996］には nuql-i-bādāmī, nuql-i-pištah「アーモンドやピスタチオの菓子 (confection)」が記載されている。唇を吸うだけでなく齧りもする、というのである。

165）チャンパー（キョウチクトウ科インドソケイ Frangipani, *Plumeria*）の花は薄クリーム色をし、印度古典文学に於いて香りのよいものの代表である［中村 1994: 127–130］。この花からは香油や香水を作る［同掲書］。パンジャービー語の古典詩『ヒール・ラーンジャー』に、美女の白い歯をこの花の蕾に譬えた例がある［北田 2015: 16］。つまり、美女の歯が白く整った形をしており、唾液が香しい。

166）後半句の統語法は分かりにくいが、述べられている内容はおおよそ次のようなものであろう。Platts 辞書［2004］によると H. kalār/kalāl とは「ヒンドゥー教徒のカーストの一つで、酒の蒸溜を生業とする。棕櫚（パルミラ椰子）や棗（なつめ）の樹液を採る者」つまり、樹液を発酵させ蒸溜して酒を造るのである。また転じて、酒店の主人や酌人をも言う。P. munjal とは、パルミラ椰子（*Borassus flabelliformis* オウギヤシ、多羅樹）の実の核のこと。この樹の花序液や樹液から砂糖（パームシロップ、パームシュガー）が採取できるという［<https://ja.wikipedia.org/wiki/ヤシ>（最終アクセス 2018 年 4 月 3 日）］。パルミラ椰子と椰子酒については、西岡［1988: 158］にも記述がある。西岡［1988: 152–155］には、サトウナツメヤシ (*Phoenix sylvestris*, H. khajūr) から作る酒についても詳しい。以上を踏まえて考えると、派生語 munjalī は、おそらく樹液から作った酒のことであろう。

167）視覚的に棕櫚の実の形は、女体の部位、例えば尻や乳房に似ているが、この詩節の前後の文脈は接吻のことを述べているから、むしろ形ではなく唾液の甘美さを棕櫚酒に譬えるか。

168）サンスクリット古典詩では、蜜蜂が女性の蓮華のような口の芳香に惹かれてブンブン飛び回ることが言われる。

＊ ＊ ＊

28 頁

⑩　私は世の人々が記憶し続けるようにと、あなたの御名[169] においてこの新奇なる物語を書いた。

⑪　もし知識人が決意して眺めてみるならば、この宴（＝この作品）には

⑫　一つ一つの二行詩 (bait) に、すぐれた酌人が［ひそんで］おり、恋の酒を飲ませて心を酔わせてくれるだろう。

⑬　たとえデカンの昔の (avval) 芸術家たちが、誰もこの（＝ダカニー語による）言語芸術の言語表現を［用いて］著作をしなかったとはいえ、

⑭　あなたは私に命じ指図した。［私は］今日、このような芸術を為して示したのである。

⑮　さすれば熱心に、この［詩の］芸術についての賛辞をお聞きなさい。［詩学を重んじる］イラクの人々の贈り物と見做して、所望しなさい。

【解説】

ヌスラティーは 29 頁⑭以下で、自分はもともと宮廷に出仕する一介の兵士であったが、皇帝に才能を見出され、文人教育を受けさせてもらったお陰で詩人となることができた、という旨を述懐する。彼自身の言葉によれば、ダカニー語は現在に至るまで未熟な言語にとどまり、ダカニー語詩は十分な水準に達していなかったが、それを自分が完成させたのだ、という。

彼はさらに、『愛の花園』執筆の契機となった、ある年の断食明けの祭りにおける出来事を述べる。

＊ ＊ ＊

39 頁

⑤　断食明け (iftār) の祭り (‘īd) がやって来て、家々で友人を集め、食布を広げ［御馳走をふるまった］。

⑦　たいそうな賑やかさで、家々から人々がたくさんの列をなしてイードガー（‘īdgāh, 祝祭の会場）に向かう。

［中略］

⑰　ビージャープルの驚異のイードガーは、高さについて太陽の王座にも引けを取らない。

⑱　それは「高貴の館」と呼ばれ名高い。全ての階段は何層の階よりも（＝何階建てかの建物よりも）高い。

⑲　その上部には魔法の［ドーム状の］四阿（あずまや）が設置され、高き天空・穹窿の様である。そこに描かれた花々は数々の恒星のようだ。

⑳　あらゆる方向に真っ赤な主賓席［の絨毯］が広げられ、その清らかな列はどんどん素晴らしさを増してゆく。

［中略］

40 頁

⑩　親しき友人たちが祖国愛を抱いて訪ねてきたので、私は友たちと集い、宴を祝おうとした。

⑪　私たちの中に一人の年配の人がいた。彼は高貴で気高く、非常に優れた家柄の出であった。

169）ヌスラティーの庇護者であった君主アリー・アーディル・シャー二世を指す。

⑫　使徒の子供たちの末裔であった。この高貴な性格の持ち主の名をアリー[170] と言った。
⑬　人々の心をよく理解し、優しく、あらゆる人々に対して健やかな気持ちで接していた。
⑭　この人は私たちと一緒にいて、少しもよそよそしいところがなく打ち解けていた。この人の家は、夜も昼も娯楽の館も同然であった。
⑮　この場所に［私たちは］好んでやって来ては楽しみ、皆で集まっては仲良く宴を開いていた。
⑯　娯楽のついでに談話が始まると、この人は突然、次のようなことを話し始めた。
⑰「ペルシア語の詩人たちは美しい言葉を話し、自分たちの芸術にあらゆる知恵を尽くしていた。」
⑱「［彼らの］一人一人が［皆］恋の物語を語った。それを聴いて誰の理性が保たれようか？[171]」
⑲「しかしながら、このデカンの土地には古い歴史があるにもかかわらず、誰も芸術性のある良い物語を作らなかった。」
⑳「とはいえガワースィー (Ǧavāṣī)[172] が［そのことについて］いくらか思いを為し、最近『めずらかなる美の園』を著し［てはいるがねえ］。」

41 頁
①　［このように語る］彼（年配の友人）の意図は、私（ヌスラティー）を促して、仕事（執筆）に取り掛かろうという活き活きとしたやる気を起こさせることにあった。
②　その時、その［集まり］の中から一人の知恵ある男――その名をナビー・イブン・アブドゥッサマドと言った。
③　彼は味を知り（＝芸術を理解する心があり）言葉を吟味する文筆家であった。大いなる知性の宝庫［のような人物］であった。
④　詩を理解する高き能力という雨雲で、私の才能という樹に雨水を降らしてくれていた[173]。
⑤　私の方を見ながら口を開き、心に思う意見を述べ始めた。
⑥「君は今日、世の中の師匠［として］の／に対し (par) 名声を持った人の弟子である。」
⑦「外国の学問の力を保持し、短期間のうちに新規なる発明を為す［ことができる］。」
⑧「君は、いかなるところでも困難を感じることがないだろう。アリーの御名が君の為に、困難を解決してくれるであろう。」
⑨「デカンにおいて君は今日の勝利者である。高邁なる詩の芸術において魔法を為す者である。」
⑩「君の芸術の魔術 (chand) が顕現するところでは、嫉み［謗る］者たちの口は封じられる。」
⑪「羊の群れの［荒々しい］略奪者たち（＝詩人たち）の中に、君の芸術はある。君の前で、批判者たちは女々しい。」
⑫「敵たちは君の名声により耳が聞こえなくなる。見ることができなくなり、泣き泣きするうちに目が潰れてしまう。」
［中略］
⑭　世界に存在するたくさんの物語の中に新奇なる物語がある。それはマドゥマーラティーの比類なき物語である。

170）君主アリーとは別の人物。
171）誰しも感動で理性を忘れた、という意味。
172）ヌスラティーとほぼ同時代の、ハイダラーバード（ゴールコンダ王国）の詩人。
173）私の作品の善き理解者であった、という意味。

⑮ ［今まで］多くの者たちが苦悩に耐えていたといえども、しかし、これは君の為に取って置かれた宝なのだ。」

⑯ 「君は“ビスミッラー”と唱えてこの物語を書き始めなさい。今、君には神のご加護があるのだから。」

⑰ 親友たちは［皆］息（＝声）を合わせて私を促し、すぐさま私もやる気を起こして立ち上がった。

⑱ 神のご加護が［示され］、旅人が目的地に向かって歩き始めたとき

⑲ 意識の平原が空っぽ［で広々としている］のを見た。そこに、芸術という都市が全く新しく［建設されたのを見た］。

42 頁

① 題材という沢山の宝が溢れているのに、宝石の計量士（＝宝石細工師）が仕事にあぶれているのを［見た］。

② 話術というバーザールが［幾つも］立っており、意味という［沢山の］商品が道を塞いでいる。

③ 平明さという甘い菓子が満ちあふれているのに、それを配る勇気のある者は誰もいない。

④ 好奇心によって、数寄者 (sukī/sūkī = H. sukhī) は幾ばくかの重量／韻律 (vazn)[174] を持つ“将軍”と呼ばれる。

［略］

⑦ 私の先駆的な才能により工夫を為して、［大量の］アイディアという荷物の上に荷物を［何層も何層も］積み上げた。

⑧ 新しい韻文という美しいガート（河畔の沐浴場・船着き場）にやって来て、この韻律という［未踏の］旅路に［新たに足を踏み出した］。

⑨ ［たくさんの］ページという平原が広々と拡がり、何列もの隊列（＝文）を滞ることなくそろえた。

⑩ その［隊列の］ひとつひとつの文字は皆、選りすぐられた勇者で、勇者としての美質により名高かった。

⑪ 一つ一つの詩節 (šeʻr) は将軍／指揮官であり、命を懸けてお互いに協力し合っていた。

⑫ 脚韻において［戦隊の］前衛の地面に［進軍し］、カーフィー（韻）という先陣を進めて

⑬ ［それらの詩節の］初句 (maṭlaʻ) は上昇 (uṭhān)[175] の精髄。攻撃された場所から逃げるる者たちにとっての［避難］所。

⑭ 一つ一つの“鸚鵡の言”（＝お伽噺）は愛の宴会場。一つ一つのお伽噺 (dāstān) は理性にとっての戦場（＝恋の熱情と理性がせめぎあう場）。

⑮ ［たくさんの］点 (nuqaṭ) という春に、酔象たちは立派で、新奇なる発明という馬たちは技巧により飾られ

⑯ 宝石を縫い込んだ衣服（＝美しい単語を韻律に従って配置すること）が素晴らしい。巧みなる頭韻 (tajnīs) はその武器。

⑰ 題材についての知識はまさに高く、彩り鮮やかな［たくさんの］単語は出陣旗［のように高く揚がる］。

174）A. vazn はもともとは「重量」を意味するが、詩学では「韻律」を意味する用語として用いられる。ここでは、市場で商品の重さを天秤にかけて量ることと、詩の言葉のリズム（韻律）をバランス良く整えることを掛ける。

175）おそらく軍事用語。

⑱　きわめて優れた文体・スタイルという春により、勇猛さの行進（進軍）と同時に太鼓を打ち鳴らし
⑲　戦場の平野を勝利して［敵を］震え上がらせ、芸術という都市の城門を［征服し］開かせた。

43頁
①　知識人たちは皆、私の大胆さを見て「でかした！ヌスラティーよ、本当のことを言え」と言う。
②　私は、自慢の言葉を言うのは苦手で、尊大ぶることは好きではない。
③　口を無理やり引っ張ってこじ開け、息を無理やり吐いて、自分の詩を自慢することは、私にとって、自分を打擲するに同然である。
④　私は、心を楽しませる物語を合わせて、比類なき美しい文体で韻文にした。
⑤　私の物語は、悪くも良くも、私［自身の］目には、愛すべき出来栄えに思われます。
⑥　いにしえの語り草の覚書をしたためた。誰も、自分が作ったサワーミルクを酸っぱい（不味い）とは言いません。
⑦　でも私の文芸は、神秘主義者とともにあるのです。彼らの手中には公平の王国があるのです。
⑧　ここで、心により真実を理解するならご覧ください。大海を手からこぼしてみせるのは容易いことではありません。
⑨　神秘を知る者は、一つの点［を知る］だけで十分だそうです[176]。たとい人々が十の欠点を徒に咎めようとも、そんなことは気にしなくてよろしい。
⑩　もしこの［作品の］中から一つの対句 (bait) でも役立つことがあるなら、［私のした］艱難辛苦の仕事は甲斐があったと言えましょう。
⑪　周りの人たちに「私（ヌスラティー）は、世界の師匠の弟子だ」ということを認めさせることができるなら［私の苦労は報われるのです］。
［略］
⑯－⑳　私は取るに足らないものであるが、王の慈悲の眼差しを頂ければ光栄にございます。
［略］

44頁
⑳　もともと初めから［この］物語の香りはとても優れていた[177]と言えども、それに私が手を加え、素敵なプレゼントになりました。
㉑　元の物語の中に、もともと心を誘うような素敵さがあるのだが、それに手を加えて整えた結果、その彩の鮮やかさは二倍になった。
［略］

45頁
③　マノハル王子は愛する者たちのヒーロー、その恋人はマドゥマーラティー。
［略］
⑩　この世界のめぐりが続く限り、この酌人の宴（＝この作品）が記憶されますように。
⑪　物語に詳しい、いにしえの繊細な芸術を理解する人（いにしえの作家）は、この物語を次のよ

176）一滴から大海を知ることができるだろう、という意味。
177）マドゥマーラティーの物語自体は古くからあったものであることを示唆する。

うに物語っております。

（こうして本文が幕を開ける）

【解説】

41 頁⑭⑮、44 頁⑳㉑、45 頁③から、『愛の花苑』の粗筋自体はヌスラティーの発明ではなく、昔から人気があったマンハルとマドゥマーラティーの恋と冒険についての物語を利用したということが分かる。主人公の名前 Manhar (Skt. Manohara), Madmāltī (Skt. Madhumālatī) から判断すると、基になった物語はヒンドゥー教徒の伝説であったのだろう。実際、物語の冒頭でヨーガ行者が登場するなど、ヒンドゥー教的要素は端々に見て取れる。

作品の結びにあたって、ヌスラティーは今一度、ダカニー語とダカニー語詩についての彼自身の感慨を述べる。218 頁第⑤詩節以下で、ヌスラティーは君主アリー・アーディル・シャー二世に対する賛辞を捧げ、この書物の結びとする。そこでは次のような旨のことが述べられている――

“世界の導師” (jagat guru) イブラーヒーム王は、デカンの国を［芸術・文化の］庭園となした。この庭園に、［次の］ムハンマド王が春をもたらした。アリー王は、それを受け継ぎ、技芸の花園に色と香を与えた。

＊ ＊ ＊

218 頁

⑳　繊細／細やかな感性 (nazākat) の森に潤い (ābrū) を与え、芸術 (hunar) の花園は色と香を得た。

㉑　このユニークさ (sivāī) は世界の師匠（模範）(ustād) となった。いつもいつも時代の教師となった。

㉒　芸術 (hunar) は時代／世の中 (daur) に青春［の華やぎや力］を置いた。それをデカン (dakkhan) は二倍にし、賢さ (sujānī) を得た。

219 頁

①　おお吉祥なる者 (sa‘īd)（= アリー王）よ！芸術という宝石をあなたこそが与え、高い値段で再び買い取ってくださいました。

②　デカンの言葉 (dakkhan kā kalām) は、未熟なる生まれであった。しかし、あなたが［為した］教育により、全く成熟した。

③　あなた［に仕える］詩人たちは繊細なる詩 (še‘r-e-nāzuk) を作った。その描写が美しい人々[178]の唇に容れられるように、と。

④　微細［な違い］を見る［ことができる］人々 (bārīk-bīnān) の心は、最初［に作られた］デカンの詩 (še‘r-e-dakkhan) がどんなものだったかを理解する[179]。

⑤　今の詩を適当に (sarsarī) 為す者を［人が］聴けば[180]、「あっぱれ、なんと素晴らしい」(marḥaban anvarī) と言う［だろう］。

178）xūbān, 善き人々、教養人、という意味にもなり得る。高貴なる人々は、粗っぽい味や言葉を舌に載せるに堪えない。

179）この詩節は様々に解釈でき、厄介である。「最初」(avval) というのは、洗練される以前の昔のデカンの詩のこと。「鑑識眼を持つ人々は、古いダカニー語詩がどんなに粗野・稚拙であったかを知っている」ということ。

180）この新体詩を誰かがほんの口すさびに呟いたとしても、それを人が耳にすれば。

⑥　デカンの古い詩 (kuhan še‘r) は今［までに］無数にある［が］、古いスタイル (kuhanah taqvīm) はゴミ (A. radd) の様に思われる[181]。

⑦　あなた様から特別に頂戴した恩恵、私は［この書物の中で］まさにそれを開示して世の中に (jag mēṅ) 知らしめました。

【解説】

イブラーヒーム・アーディル・シャー二世がビージャープル[182] で始めた新感覚 (nauras) 運動の気風を受け継ぐ君主アリー・アーディル・シャー二世の御代に、ダカニー語詩の新しいスタイルがさらに洗練されていった[183]。それを、この書物でも示す、というのである。

君主アリーに対する賛辞に続き、219 頁⑧からは、この書物を作成するにあたっての矜持が述べられる。その際に、作者ヌスラティーの、言語芸術に対する美学・哲学や方法論が語られる。

＊ ＊ ＊

221 頁

①　非常に繊細な芸術を身に着け、あなたは「詩はハラール（合法的な）魔術だ」と言う。

②　文法を持つ詩こそ、詩である。もしそうでなければ、それは単に驢馬の詩である。

③　私が話す言葉の価値を重くした。喉から出る一つ一つの言葉が心を彩った。

［中略］

⑧　［二行詩 (bait) は］［様々な］意味の姿を映し出す鏡である。ペルシア語詩のように、デカンの（＝ダカニー語の）詩を詠んだ。

⑨　明瞭さにおいてペルシア語詩が美しい言葉であるとすれば、インドの言葉 (hindī bacan) に対し、恒常的に勝利を持つ。

⑩　一方で、インド［の言語］の詩 (še‘r-e-hindī) の幾つかの技巧 (hunar) は、ペルシア語詩の中に取り入れることができない。

⑪　私はこれら二つの［言語の］技巧 (hunar) のエッセンスを得て、二つの［言語の］芸術 (fann) を合体させ、新しい詩 (še‘r-e-tāzah) を詠んだ。

⑫　ペルシア語の詩を知る人は、これを聴いて褒めてくださるだろう。インド語の詩を知る人々は、これを聴けば、心の底から「いいじゃないか！」と言うだろう (kahē hāṅ)。

⑬　見る目の無い人々[184] は、嫉妬して、焼き肉 (kabāb) のようにじゅうじゅうと身を焦がすだろう。「［単なる］ダカニー語の書物 (dakhanī kitāb)［にすぎない］」とだけ言うだろう。

⑭　理解力のある人々は、商品 / 品物［そのものに］用がある。［品物の置いてある］商店の［建物の］屋根や梁には関心がない。

181）「スタイル」と訳した P. taqvīm は、作詩のシンメトリーやプロポーションのこと。kuhan še‘r と kuhanah taqvīm と読んだが、前者を kahan še‘r と読めば（文法的に無理があるものの）「詩を言うこと (kahan)」となる。もしこれを採るなら「デカンの詩を言うこと（＝作詩活動）は、今や［盛んになって］数限りない。［これらと比べると］古いスタイルはゴミの様だ」となるが、どうであろうか。

182）B.Y.J.A.P.W.R. = bījāpūr. ただし、新期インド・アーリア語の多くの言語では語末の母音の長短の区別は無いから、「ビージャープル」と表記しても間違いではない。

183）北田［2018］には、音楽文化振興家としてのアリー・アーディル・シャー二世を讃えた 27 頁第⑦詩節–28 頁第③詩節が翻訳されている。

184）a-dēkhyā. 文字通りには「見なかった［人］」という意味だが、Skt. a-dakṣa, Pkt. a-dakkha「能力のない者」の転じた語か？

⑮　素晴らしい (nāmdār) 言語表現 (suxan) が生まれた［この］言語 (zabān) は、世に記憶されるだろう。

⑯　耳は、あらゆる人々の心に味わいの支柱 (arbāb-e-ẕauq) を与えるだろう。［人々が］私の詩を聴き、理解することにより、［耳は彼らに］喜びを与えるだろう。

⑰　理解力の無い人々や嫉妬深い人々は嫌悪するだろうが、私は両者を許そう。

⑱　味わい深い詩も、愚か者の耳を喜ばさない。恩寵の色彩も苦しむ人々の眼を惹かないように。

⑲　ある者においては、これを聴き、心 / 気持ち (ṭab‘) が冷え冷えとするだろう。また他の或る者においては、心に妬みが苦痛のように感じられるだろう。

⑳　聴いた時、心 / 命 (jān) に苦しみが増大するだろう。可哀そうな者には心地よく耳に思い出されるだろう[185)]。

［中略］

222 頁

①　［蒙昧な者たちによる］混乱により、言語表現 (suxan) は味気なくなる。

その時、［ペルシアの詩聖］サァディーの言葉が思い出される。

②「もし池を薔薇水で満たすとも、犬がその中に飛び込んで泥水にしてしまう」

③　もし高慢と悪意なく心がきれいな人が誰かいたら、その人は私を公平に評価してくれると期待する。

④　そのような人なら［自らも］芸術家であり、この詩を見て、どの箇所でどのような作業が行われたのかを見て取るだろう。

［中略］

⑯　心が憔悴した人は、［この詩を読めば］心に涼しさを覚え、愛の叙述の美しさに恥じらうでしょう。

⑰　私の［作品の中の］男らしい詩は男たちの好みとなり、美しい顔の女性たちを魅惑するでしょう。

⑱　一つ一つの言葉はそれぞれ独自の美を備えており、唯一無比である。世界中で (janam jag) これ（ひとつひとつの美しい言葉）は恋人たちに好まれる。

⑲　謙遜することなく言わせてもらうと、この詩は、高貴の新鮮なる春である。

［中略］

223 頁

④　神様が、私の労苦を為した（私を道具として、この労作を為したのは神様自身である）。この作品は、全ての人に手向けた贈り物であり、［私の］生命よりも大切なものである。

【結語】

ヌスラティーの死後 12 年ほど経った西暦 1686 年、ビージャープル王国はムガル帝国に征服される。しかし、デカンで育まれたウルドゥー語（ダカニー・ウルドゥー語）詩は、18 世紀初めにデカ

185）否定辞が欠けているが、「心地よくは耳に思い出されない」と解すべきか？あるいは逆に「苦しみが増大していても、これを聴くなら、耳に心地よさを再び思い出すだろう」ということか？

ン出身の詩人ワリーによって帝都デリーの文壇に持ち込まれ、北インドでもようやくウルドゥー語を用いて作詩することが流行することになる。為政者たちが自らの威力を誇示するために造らせた巨大な建造物は或いは廃墟となり或いは灰燼と化したが、詩や音楽の節回しや、そこに歌われた刹那的な感覚は生きながらえ、後世に伝えられていった。そのことを踏まえてヌスラティーの言葉を見るとき、深い感慨を禁じ得ない。

【謝辞】
この研究は科学研究費補助金 26370093 および 15H03282 の助成を受けました。

【略語表】

Phil.M. = Philadelphia manuscript. 文献表の「フィラデルフィア美術館所蔵写本」の項を参照せよ。
A. = Arabic, D. = Dakanī, H. = Hindi, P. = Persian,
Pkt. = Prakrit, Skt. = Sanskrit, U. = Urdu.

【文献表】

【原文テキスト】

‘Abdulḥaqq (= ‘Abd al-ḥaqq). 1902. *Maṣnavī Gulšan-e-‘Išq. Taṣnīf-e-Mullā Nuṣratī Malik al-šu‘arā-e-‘Ādil Šāhīyah Bījāpūr. Taṣnīf-e-sanah 1068 hijrī*. Murattabah Maulavī ‘Abd al-ḥaqq. Karāčī: Anjuman-e-Taraqqī-e-Urdū (ṭab‘ avval).

フィラデルフィア美術館所蔵写本 Philadelphia Museum of Art: 1945-65-22(1a–255b) <http://www.philamuseum.org/collections/permanent/49733.html> (last access: Dec 28, 2017).

【参照文献】

ヴァーツヤーヤナ 1998『完訳カーマ・スートラ』（東洋文庫 628）岩本裕（訳著）平凡社.

ヴァラーハミヒラ 1995『占術大集成 1　古代インドの前兆占い』（東洋文庫 589）矢野道雄・杉田瑞枝（訳注）平凡社.

加賀谷寛 2005『ウルドゥー語辞典』大学書林.

北田信 2015「ワーリス・シャーの愛とエロス――パンジャーブ語のスーフィー文学『ヒール』」『西南アジア研究』83, pp. 1–19.

――― 2018「ウルドゥー語教育と南アジア伝統音楽」『外国語教育のフロンティア』1, pp. 237–246.

古賀勝郎・高橋明（編）2006『ヒンディー語＝日本語辞典』（第 2 刷）大修館書店.

中村元（編著）1986『仏教植物散策』東京書籍.

西岡直樹 1988『インド花綴り――印度植物誌』木犀社.

羽田正 2017『東インド会社とアジアの海』（講談社学術文庫 2468. 興亡の世界史）講談社.

矢野道雄 2004『星占いの文化交流史』勁草書房.

‘Abdulḥaqq. 1961. *Nuṣratī*. Karāčī: Kull Pākistān Anjuman-e-Taraqqī-e-Urdū (išā‘at-e-ṣānī).

Agar'cand and Nāh'ṭā, Bhaṃvar'lāl (ed.). 1996. *Ṭhakkura-Pherū-viracita Ratnaparīkṣādi sapta-grantha saṃgraha* [Rājasthāna Purātana Granthamālā 60]. Jodhpur: Rajasthan Oriental Research Institute.

Ahmad, Nazir. 1956. *Kitab-i-Nauras by Ibrahim Adil Shah II. Introduction, Notes and Textual Editing*. New Delhi: Bharatiya Kala Kendra.

Apte, Vaman Shivram. 1992. *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, Revised and enlarged edition. Kyoto: Rinsen Book Company (third printing).

Hāšimī, Ḥamīdullāh Šāh. n.d. *Matan, urdū tarjumah va ḥall-i-muškil alfāẓ, Vāriṣ Šāh Hīr*. Urdū tarjumah: Ḥamīdullāh Šāh Hāšimī. Lāhōr: Maktabah Dāniyāl (Maktabah Daneyal).

Ḥussain (Mirzā Ja‘far Ḥussain). 2011. *Qadīm lakhnaū kī āxirī bahār*. Naī Dehlī: Qaumī Kaunsil barāe Farōğ-e-Urdū Zabān.

Hutton, Deborah. 2011. “The Pem Nem: A Sixteenth-Century Illustrated Romance from Bijapur,” in Navina Najat Haidar and Marika Sardar (eds.), *Sultans of the South: Arts of India’s Deccan Courts, 1323–1687*, New York: The Metropolitan Museum of Art. pp. 44–63.

Ja‘far, Sayyidah (ed.). 2008. *Dakanī Luğat*. Naī Dehlī: Qaumī Kaunsil barāe Farōğ-e-Urdū Zabān.

Kane, P. V. 1986. *The Harshacarita of Bāṇabhaṭṭa* (Text of Ucchvāsas I VIII). Delhi (etc.): Motilal Banarsidass (reprint).

Kāšmīrī, Tabassum. 2009. *Urdū Adab kī Tārīx: Ibtidā sē 1857 tak*. Lāhōr: Sang-e-Mīl.

Platts, John T. 2004. *A Dictionary of Urdū, Classical Hindī and English*, edition 2004. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.

Śāstrī, Devadatta (ed.). 2003. *Śrī-vātsyāyana-muni-praṇītaṃ Kāmasūtram: Śrī-yaśodhara-viracita ‘jayamaṅgalā’ vyākhyā-sahitaṃhindī-vyākhyā-bhāṣyopetaṃ ca*. Vārāṇasī: Caukhambhā Saṃskṛta Saṃsthāna. Saptama saṃskaraṇa, Vikrama Saṃvat 2060 (= AD 2003).

Sarma, Sreeramula Rajeswara, and Yaduendra Sahai. 1995. “Gushing Mercury, Fleeing Maiden: A Rasaśāstra Motif in Mughal Painting,” *Journal of European Āyurvedic Society* 4, pp. 149–162.

Steingass, F. 1996. *A Comprehensive Persian-English Dictionary*. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.

Yano, Michio (ed./tr.). 1997. *Kūšyār Ibn Labbān’s Introduction to Astrology*, [Studia Culturae Islamicae 62]. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.

Yano, Michio. 1994. “Calendar and Related Subjects in the Nīlamatapurāṇa,” in Yasuke Ikari (ed.), *A Study of the Nīlamata: Aspects of Hinduism in Ancient Kashmir*, Kyoto: Institute for Research in Humanities, Kyoto University. pp. 223–236.